

## 川股隆『飛鳥田市政の財政事情と財政運営』講演記録・暫定版

(注)川股氏による最終校正版は後日発表予定です

NPO 法人田村明記念・まちづくり研究会 公開研究会

2017年3月16日(木)午後2時より5時

横浜市民活動支援センター4階セミナールーム2号

田口 きょうは、公開研究会に川股隆さんに来ていただきました。川股さんは、企画調整室の時代に横浜市にお入りになり、主に財政分野を中心に、お仕事をされてました。今回川股さんをお願いしたのは、今まで研究してる中で、田村さんのいわゆるハードの都市計画が、何となく分かりつつあるんですが、お金の絡んだ話の部分が理解しづらい。特に、飛鳥田時代の財政の規模の小ささ、が際立っている、という感じを持ちました。その後、何倍にも増えていく、という時代を迎えるわけです。非常に規模が小さい財政の中で、どういうふうに、都市づくりをされていたのか。遠藤包嗣さんにご相談しました。それだったら財政の専門家の川股さんがいるということで、きょうわざわざ茨城のほうで有機農業をされておられる合間をぬって来ていただきました。お話いただける内容が相当多岐にわたり、深い部分をお聞きできる大きな期待感があります。以上、雑なご紹介ですが、川股さんのほうから、詳細なレジュメも頂戴しております。お話を楽しみに聞かせていただきたいと思います。よろしく申し上げます。

川股 川股です。このような場を設けていただきまして、大変ありがとうございます。私も田舎へ帰って、ちょうど10年になるんですけども。なかなか自分のことは、整理する時間もなくて。農作業に追われてるわけでもないのですが、才能がなくてできません。たまたまこういう、一番農閑期のこの時期に、昔の仕事を多少整理して考えることができました。田口さんのおかげだなと、思っております。それで、田舎へ帰って有機農業をやってみて、ちょうど私のところのPR用のカレンダーを作ってます。カレンダーの表紙なんですけど。それとあと、米粉麺とかお米を作ってますので、それの案内を。

あと、僕は市役所にいた頃から、多分30年ぐらい前だと思うんですが。自治体職員向けで又市民向けの雑誌がありまして、時々、寄稿しています。その中でも財務実務というのを、担当してました。現役の頃から7、8年前までは、毎月書いてたんですけど、毎月書くのはつらいんで、今は2カ月に1回ぐらい書いてます。その関係で、若い人たちに、どういふ本を薦めたらいいのかを頼まれて書いたのと。それから一番最近のこの、3月号になるんですが。私の財務実務のものが入ってます。

今回、飛鳥田さんの財政運営については、僕はデータが結構あるかなと思ったんですけど、実は引越してるうちに僕自身にはないんです。地方財政の決算統計はホームページに出てるんですが、昭和44年から決算統計が決算カードという要約版が出るはずだったと思ってました。たまたま見ましたら、平成13年からしか今は、総務省のほうから出てない。昭和44年から作ってるんですけど、それがなかったものですから、あんまりきちんとしたデータが取れてません。田口さんからデータを送っていただいて、多少それは私のレジュメともう一つ別に、経過メモというようなことでまとめています。飛鳥田さんが昭和38年、1963年に当選してから私が市役所辞めるまでの何年間です。私が話すことも、結局のところ僕がどこで何をやっていて、どういう情報を得たかということが中心になります。先ほど田口さんが言いましたように、あまりにも小さな財政規模の中でというのが、あったかと思えます。

例えば、昭和38年ですと、国の一般会計の歳出額も3兆円です。横浜市も100分の1の330億円です。ずっと平成10年まで入れておきました。ある種のイメージみたいのがつかめないと、話す印象が分からないかな、というよう

なこともありますので、入れさせていただきました。そういう意味で、私はどちらかという数字には結構こだわり人間なんです。今日はデータのものはあんまりなくて、比較的自分の印象か思い出みたいな形になってしまってるところもあります。そこは申し訳なく思ってます。後でデータのものが必要だったら、横浜へくればいくらでもあるんですが、なんせ、1日がかかりになりますので、なかなか来られません。そういうことでご容赦願いたいと思います。

それから、お話しすることは、あくまでも私の見方です。多分、違った立場の人から見ると全く川股が言ってるのは違うよ、となると思います。

本題に入る前に私は昭和 46(1971)年に、企画調整室に大学を卒業して入り、最初技術部という所にいたのです。総合計画をやるプロジェクト自体ができたのが6月ですから、それまで予備要員みたいなことだったんじゃないかなと、後になって思うんです。専任主幹のところは2カ月ほどいました。それから6月に機構改革で、プロジェクトができました。そちらで2年後にできる「総合計画 1985」という、田村明さんが自分の考え方で指導して作ったものです。そういう意味では横浜市もその前の総合計画があるのですが、実質的には横浜市の総合計画の最初のものだと思うんです。大変荷が重かったのですけれども、卒業して1年目からそれをやらせてもらいました。それで、実は田村さんの思い出を、その中で言いますと、多分6月に機構ができて、7月に調整課長から、これは田村さんが町田市で総合計画について講演をしたテープ起こしだ、おまえちょっとやれと言われて校正しました。

1970年に木下さんっていう町田市長さんが誕生しまして、今の石阪丈一さんの先代の先代じゃないかと、思うんです。その人が70年に町田市長になって、多分田村さんが総合計画について、しゃべってほしいということで呼ばれて行ったんだと思います。テープ起こしが私のところへきて、その校正をさせていただきました。正直言いまして、人口推計のいろんな方法だとか、ロジスティクス曲線だとか、私には全く分からないような、横文字もたくさん出てきて、私は四苦八苦したのです。その後、僕も総合計画課長になって、責任を持ってやるようになったときにも、随分そのときの田村さんのしゃべったこと思い出しました。例えば、今までの総合計画っていうのは、各局から出てきたものをばんばんと積み上げていって、ホチキスする、これがホチキス計画というんだ、とかですね。それから、うちの市にもこういう計画を作ったという形で、ショーウィンドーみたいに後ろの本棚に飾ってある。こういうのを、ショーウィンドー計画というんだとかですね。そういう計画にしちゃいけないというのが、田村さんの言い方です。なるほどなと思って、感心して校正をした記憶があります。その後も、当然2年半の中で、企画課とか調整課の人たちに比べると、プロジェクトの総合計画のメンバーは、田村さんとの会議は少なかったかとは思いますが、それでも、いろいろ議論をして、まとめていきました。それが最初の田村さんとの仕事だったと、記憶がございいます。

それは、レジュメに沿って語らせていただきます。多分、途中でいろいろ話が脱線しますので、脱線するときには脱線すると申します。といいますのは、その頃のいろんな、雰囲気をつかんでいただくには、そういうこともちょっと入ったほうが、分かるかなと思いますので。それで、お話をいただいたときに、さてどういうふうに整理していくべきかと思いました。実は私も大学では、歴史なんかをやっていた人間ですので、あんまり歴史っていうものを現在の視点で見ると、どうしても断罪しちゃうので。あんまりそれは良くないということは、思ってます。できるだけ、飛鳥田市政の時代背景を考えて、そのときその場で財政課の人たちがどういうふうな判断をしたのかを、念頭に置いて考えていきたいと思ってます。

というのは、やはり私たち団塊の世代は、ある意味幸せな時代だったなと思うんです。同時に、日本経済が大転換、極めて急速に成長していくときでありますので、次々にいろんなことが変わっていくわけですね。ここには、所得倍増だとか高度成長とかがありました。私にとっては、むしろ都市化っていうか、僕も田舎から都会に出てきた人間です。うちのおじさんたちだって、それこそ高校終わって都会に出てきて、具体的に言うと日本鋼管に入ってとかですね。そう

というような形で、大移動の時期です。それと同時に、松下さんが言ってる大衆化社会っていうようなことで、言ってみれば農村的な価値観、強い絆みたいなところから都心に移って、言葉は悪いですけど、烏合の衆みたいな、そういう形でもって、市民とはとても言えないような形で、ひとつの社会をつくっていくように、大きく変わっていくときです。そういう意味で、そういうのを背景にしておかないと、なかなか分からないところもあるな、というふうに思います。

それから、もう一つはやはり多分研究会そのものがそうなんだと思うんですが、やっぱり現代的な目で見て、いろんな葛藤を教訓として、学びのものとしてあるんだろうと思います。そういう点二つ、きちんとできるだけ切り分けてと、考えてます。横浜市の予算の発表があると、横浜市の予算の概要は、昔自分がそういうのを作ったな、と思いながら読んでます。それから、横浜にいた頃から茨城県、一応職員研修の雑誌が全国向けなので田舎で分からないといけないなと思っていました。茨城県は、地元ですから多少分かりやすいんで、茨城県のデータを見たりしてました。最近では7、8年前から、つくば市の人達は横浜にいた頃から、何となく仲間だったんですけど。横浜ですとネットワーク神奈川とかお付き合いがあったのですが、今つくばネットのかたがたとお付き合いがあります。いろいろ財政的なアドバイスなんかをしています。そういう時でも、やっぱり街づくりみたいな話も出てくるんですね。そういう点からしても、教訓的なのは何なのかみたいなことを考えてみたいなと思って整理しているところです。

2番目に、当時の財政的な概観なんです。私は昭和46年に入ってますから、既に飛鳥田さんが38年から、1期目が終わり、2期目が終わって、3期目の選挙で再選で当選をしたときに、入ってるわけです。4月が統一地方選挙ですから。市役所に入っても1カ月ぐらいいは、選挙の手伝いをさせられてまして、皆で何だ市役所入ったのに1カ月間はこんな選挙の手伝いばかりやって、アルバイトみたいじゃないか、同期に入った連中と言ってました。そういう形で、46年に入りました。その前の8年間っていうのは直接的な印象はないんですが、データのなところも含めて見ていただきますと、この時期は、人口が毎年10万増えるという時期です。飛鳥田さんが当選した昭和38年は、多分150万だったと思います。それが、私が入る1年前の昭和45年が220万ですので、大体7年間で70万増えた、単に1年にすると10万人ということ。1年で10万人増えてくるということは、大変な話だったんです。これが大変だったっていう、実感がいまひとつ僕はないんですけど。学校建設に追われていたのは、いろんな資料を見ると全部出てきます。学校建設に追われて、まちづくりに充てるお金がないんだと、というようなことが当時の資料でも出てきます。僕は総合計画をやるわけですけど、そのときに中期計画というような形でもって、その前の建設一本やりの建設計画っていうものがあったのですが、その後福祉計画を追加しました。先ほど言いましたように、入江調整課長が中心になって、僕が入る3年前ぐらいにつくった中期計画があります。『中期計画73』っていうのが、43年から48年までで。ダイジェスト版をもって来るのですが、本体はないんです。それによると、教育施設が、5年間の中で小学生が7万人増えますと、中学生が2万人増えます。新設校が47校必要で、用地造成も入ってます。多分小中校合わせて62校ですか、多分それまでの小中学校の数を合わせると200校ぐらいだと思います。相当な数を5カ年だけでも造るという計画だったのです。そういうことに伴って、その頃の教育費はどのくらいの割合だったかという、一般会計の18パーセントです。それで、教育施設整備費が教育費の中の7割を占めます。ちょっとその下に、スライドさせてますけど、2)の一般会計っていうのが2534億円、一般会計の18パーセントっていうのは456億円で教育整備費が7割というのは319億円になります。その頃の、普通建設事業、要するに建物造ったり、道路造ったりの建設費用が、859億円ですので、4割がですね、学校建設費に充ててるというようなことになります。その後71年も教育費は一般会計の17.2パーセントですので、そういう点では教育に重点を置くというよりは、とにかく義務教育で学校を造る。まずは市町村の行政というのは、一番学校が優先されますから。特に、追われに追われたということになるかと思います。大体、現在の段階の教育費を見ますと、10パーセントぐらいですから、そういう意味ではプラス10パーセントぐらいが、

建設に上乘せされてたというふうに理解していただければよろしいと思います。

それで、教育に追われたということと、もう一つはちょうどこの頃ベトナム戦争が終結を迎えてる頃ですけども。私たちなんかいわゆる学生の頃から、ベトナム反戦とかいろいろやった人間ですが。五大戦争っていうようなことで、『公害、ごみ、道路交通、水、公共用地の確保』ということが、都市問題として緊急の課題なんだということで、市民や議会にも伝えてます。

学校をどうしても造らざるを得ないということはあるんですが、同時に保育所といっても今のイメージの保育ということよりは、どちらかというと。両親が働いて保育にかけるといのがありますが、プラスしてやはりある程度貧しいっていうか、貧困っていうか。サラリーマン家庭ですと、大体奥さんが家にいるわけですが、その当時はですね。なかなかやっぱり両方働かなきゃいけないというような、こともある。そういう家庭もどんどん転入しましたから、保育所の整備というようなことで、在任中は年5カ所、ちょうど15年で105カ所ぐらい、飛鳥田さん造ってるんです。それから、公営住宅も600戸というのを目標でやりました、この当時はですね。ただ、公営住宅の600戸は僕の印象では、その後もそうなんですが、実際に達成されたのは500以下じゃないかなと。とにかく用地が取得できなくて繰り越しして、繰り越ししてでも結局できなくて、だったような印象が強くなります。とにかく公営住宅は大変、苦労してました。用地が確保できないという部分で、大変この時代苦労した記憶があります。

それからごみですよ。磯子のごみ焼却場は今の南部下水終末処理場の脇にある工場です。その前に鶴見のごみ焼却場が、新しい連続式の工場だったと思うんです。それまではほとんど、埋め立て処分だったわけですけど、このぐらいからやっぱり衛生的に処理をしなければいけないということになった。それまでは、多分市立南高校のグラウンドなんか埋め立て処分したごみの処分場だったはずなんです。そうやって処分することが難しくなってきたこともあって、一応近代的な焼却工場の建設に入るということになります。同時に、戸塚区のほうのこれ50ヘクタールぐらいあったと思いますが、神明台処分地という、今は多分一部公園になってるんじゃないかなと思うんですが。僕も見に行ったけど、火薬庫の跡ですよ。だから軍だったのか、火薬工場っていうか爆薬の工場があったのです。神明台処分地の確保、これも50ヘクタールを市が用地買収するというようなことをしました。

それから道路の舗装率もですね。データで見ますと、昭和38年が31.6パーセントです。これも西区とか中区とか、比較的町の所が8割ぐらいで、戸塚とか郊外のほうは2割ですね。道路舗装もそういう程度だったので、これを増やしていくということです。

その他水源対策とか交通安全対策とかも、急がれたということです。ここで見ていただくと分かるのは、要はいわゆる生活環境っていうものです。生活環境施設がとにかく足りない、道路も舗装されてないし、住宅も貧しいし、ごみも衛生的に処理しなければいけない。要するに水もそうですけども、生活環境というようなことだと思います。

ちょっと話題をここで変えさせていただきます。実は私は、先ほどお米を作ってるということを言いましたけど。年に3回ほど横浜に車に、米を積んで来るんですけども米が収穫できた9月からですね。小俣さんっていう、昔民社党の市議員さんの所に持っていきます。根岸森林公園の下に、山元町保育園っていう保育園をやってる方です。道路局の人知ってるかもしれませんが、平板議員っていうあだ名なんですね。

川股 実は中土木事務所の道路係長をやった人から聞くと、平板議員かというんです。平板(へいばん)って分かるかどうか。要するに私たちが学生運動をやっている頃に、機動隊とぶつかると、道路の舗装、歩道の部分を壊してですね。私はやりませんでしたけど、壊して投げるわけですよ。機動隊にね。だから東京の舗装が全部アスファルト舗装に変わっちゃったわけです。横浜も、それで変えたんですね。その平板を中野土木事務所はおいてある。小俣

さんはですね、その舗装されてない道路がたくさんあって、特に雨が降ると、軽トラかリヤカーか知らないんですけども、中土木事務所行って、平板をもらってきて、地域の人にどうぞと配って歩いたと、いうことで、平板議員って言うだと言ってました。親切などぶ板議員っていう言葉はよくありますけども、どぶ板よりもっと徹底した、いい議員さんだというふうに僕は思うんです。

実は、なぜ小侯さんかというんですね。昭和40年の2月に市会全員協議会で六大事業の説明をします。田村さんが説明をするんですが、大体そのときの議員さんは、こんなのできるわけじゃないかと、というのが反応だった。議事録見てないから分からないんですけど、鳴海さんが書いてる本によるとですね。そこですね、何だこんな計画出してきやがってってと、2人だけがそういう言い方をした。1人がですね、自民党の嶋村力さんなんですね。港北のほうの水防団の団長というか、覚えがあるんですね。もう一人がですね、小侯さんのおやじさんの小侯健次郎さんだった。その頃「ひげの小侯」っていわれた時代ですけど。その小侯健次郎さんが、この方は交通労組の支部長だと思うんですが、その頃は社会党の委員だったと思いますけど。この計画は「ちっちゃえこんなもんじゃ駄目だ」ということを言ったというのが鳴海さんの記録に残ってます。他の議員さん60人はおんぼろ事業を掲げたのだと言ったけど、この2人だけは、「こんだけちっちゃな計画じゃ駄目だ」と言ったらしい。

そのくらい道路もそういう状況であったということです。街路事業なんかもね僕もこの後48年ぐらいに道路局の予算をもったときに、いろいろ道路局の方から説明受けて、桜川新道っていうんですか、戦後、街路って言ったってそれぐらいしか、今までできなかった。道路予算を増やせとか、随分言われました。そうか、20年たっても、その街路ひとつしかできなかったのかというのが、私のこの頃の印象でした。

だから、こういう時代ですから、予算の中で建設事業の割合は35パーセントとか、非常に高くなってます。現在は12.3パーセントですが。現在ですと、大体1兆5000億円ぐらいの予算に対して、建設事業は1800億円で12.3パーセントです。ちょっと低いかなと僕は印象受けてますが、当時は35パーセントぐらいが、建設事業に充てるというような時代だったわけです。それで、結果として飛鳥田さんの時代は、文化や事業の市民利用施設についてはほとんど手づかずでした。ほんのわずかな青少年図書館を当時は、14区ぐらいでしたから。14区に1カ所ずつ造るとか、いうようなことです。何館かの地区センターがあったという程度だったと思います。この青少年図書館っていうのも、子どもに優しくする市政みたいなのが最初当選したときのPRがそれでしたから。そういう意味では、青少年図書館各区に一つぐらい造ったんでしょうけど。300平米か400平米ですよ。僕は後で総合計画の担当になって、ああいうちっちゃいのをどうやって処理するかっていうのが、非常に苦労したんですけども。ある程度地域の施設っていうのは、体系化付けないと困るんで。極端に言うと壊しちゃったほうが、いろんな体系付けで全部地区センターに変えちゃったほうがいいのか、なんて思ったぐらいです。そのぐらいの規模だったと思います。その程度ぐらいしかできなかった。ほとんど、そういう施設っていうのはできなかったっていうことだったと思います。

厳しい財政事業だったのかっていうことなんですね。この辺は、後のほうにも触れるんですが。この中で、普通会計、一般会計というふうにも考えてもらってもいいんですが。普通会計で、昭和48年から53年、53年っていうのが飛鳥田さんが辞めるときですが。5年間の、普通会計の歳出額と、市税の収入額これは田口さんが出してくれましたので。それをちょっと置いときます。地方交付税の基準に対する需要額とか、収入額がですね。全国市町村、都道府県の地方財政の平均的な伸びであると、いっていいかどうかっていうのは、多少問題があるんですけど。基本的にはそういうことになるかと思うので。このときの伸びを、比べてみました。歳出額で見ますと、横浜市は5年間で226.3パーセントになります。地方交付税の基準財政に対する需要額は、若干それよりも高くて、228.2パーセントです。ご存じのように、この時期っていいものは、高度成長期ですので。高成長期っていうのは、どうしても法人の税収が高く

なります。今と逆ですね。だから、都道府県市町村に分けますと、神奈川県は当ても非常に豊だったわけで。都道府県はやっぱり税収がどんどん伸びていました。市町村に比べて圧倒的に伸びてました。市町村はやはり法人関係の税金が、少ないんであんまり伸びが少なかった。そういう点からいうと、市町村だけで見ると多分この地方交付税の基準に対して需要額、歳出ですね。歳出に対応するものに比べて、市町村だけで見るともうちょっと低いと思うんですね。低いから、そういう意味では市町村平均よりも、横浜市の伸びは高かったのかもしれませんが。収入のほうで見ると、230.7 で収入額が 227.8 ですから当然、全国平均の市町村は、この基準財政収入額よりも低いわけですよ。そういう意味からすると、横浜市の税収の伸びは厳しいとは言ってもですね、全国よりは増えてる、より高かったはずなんですね。それは、人口が増えたんだから当然そうなるはずなんです、データから見ても高かったはずなんです。ということは、収入がそれだけあるならば、歳出ももっと伸ばして良かったはずだなと。歳出も伸びていいはずだった、と思います。ただ、データで見るとこういうふうになるということですね。そういう意味では、金はあったが、税収にも 20 パーセント毎年伸びてますんでね。人口急増に伴う義務的で付加的な事業が多過ぎたんだということですね。やっぱり実感としてということだけではなくて、僕はやっぱり『苦しい財政』じゃなかったんじゃないかなと。インフレ的にも、税収は 20 パーセント増えて物価も 7、8 パーセント伸びる。僕らの給料も多分、僕がいたときは 4 万 2100 円の給料表が書いてあって、入ったときは 4 万 7000 円になって、12 月のボーナスっていうか、ベースアップで 1 万円ぐらい乗せてますね。5 万いくらになってます。そういう意味では、ちょっと昭和 50 年は財政危機になってくる、国が初めて赤字国債を発行するときです。このときは、財政課にいました。この 50 年は、いわゆる食糧費とか借上料とかっていう、いわゆる規制費目っていったあんまり使っちゃ駄目というやつを、カットしました。この段階でもって、そういう規制費目と言われている、そういう食糧費、借上料、消耗品、こういうようないわゆる事務経費と、何となく飲み食いにはいっちゃんようなお金を規制しませんでした。給与のカットもしませんでした。そういう意味では、苦しい財政という意味ではないんじゃないかなと。あまりに、学校とか生活環境の整備のために、いろんな形で需要がどんどん上がって、そこに言ってみれば、文化的施設だとか何とかっていうのは、ちょっと待ってくれて言える。ごみの収集であれ、焼却工場であれ、学校建設であれ、ちょっと待ってくれてというようなことは、言えませんので。そういう意味で、大変だった。それが厳しいってというようなことになっていくのかなと思います。

財政的に見ると、もう一つこの時期に大変だったのが、交通事業の再建なんですね。第 1 期のそれまでの市電を廃止して、地下鉄に変わっていく。それからバスを全域的に普及するという。自然と赤字が膨大に積み上がるということ。昭和 41 年の 1 月に、第 1 期の交通再建をやります。このときの棚上げした額がどのくらいかのデータがないんですが。市電がですね、多分これ市内全域同じだと思うんですけど、15 円ですね。それを 20 円に値上げする。それから、バスは 10 円プラス距離が長くなると上乗せされてくんですが、それを一律 30 円にする形の交通再建をやっています。実は、交通再建の中で私たちが財政課にいた頃、市営交通の高齢者の無料バス、いわゆる敬老バスっていうのがずっとあったと思うんですが。結構、大きな金かけるんです。これが実は、交通再建のためだったんですね。別に高齢者に、敬老のために無料バスでなくて、乗っても乗らなくてもいいから、とにかく交通局にお金を出さなきゃいけない。出すための理屈として、高齢者の敬老バスということで、高齢者はどうぞ無料で乗れますから、バスや市電に乗ってくださいということで。この第 1 期交通再建のときに、高齢者に、最初は 1.5 万枚とか言ってるから、全部いったかどうかわからないんですが。その後何年かたつと 70 歳以上にいくようになります。高齢者の方は非常に重宝してたと思うんです。これは大変な批判もあるんですが、そういうことで横浜市が始めてその後、皆旧 5 大市や東京も含めると 6 大市になるかと思いますが、交通事業の再建大変でした。皆さん、横浜市から始まって敬老バスを出す形をやっています。結局、第 1 期交通再建では再建完了しなくて、48 年になってもう一度第 2 次交通再建っていうことで

再建事業を行うことになります。

それで、次の 2 ページのほうで、3 番目に『金がなければ知恵を出せ』っていうようなことが、飛鳥田さんの口癖だったかどうかは分かりませんが、物言いにはそういうふうに書いてます。金がないから知恵を出していろいろ考えるんだ。財政当局は知恵を出したんだろうかと、いうことを考えてみました。

一つは学校建設公社が 70 年、昭和 45 年私が入るときに 1 年前にできてます。これは建設省とかも含めて 5 省協定があって、要するに地方自治体に対しては、3 年先までの児童生徒数を見て、そこまでだったら補助対象にするよというような、ことだったらしいんです。住都公団は 6 年先行まで見てて補助対象にしてたようですね。だから住都公団そのものも多分、市町村に変わって学校建設したんですよ、この当時は。市町村が住宅造るのはいいけど、学校造れないから代わってやってくれみたいな。後で、学校を買い取るみたいなことをやったんだと思う。住都公団 6 年先行だったんで、これが地方自治体も 6 年先行までいいよと、いうことで。6 年だったら、子ども生まれて 1 年生になるわけですし、そこまで認めたということで、学校校舎は造ったということです。

要は、造った後に文部省の補助認証を受けて、毎年少しずつ補助金を使って、学校建設公社が造ったものを市が買い取っていく、というやり方をしたわけですね。それはそれで、非常に有効な方法だったと思います。当時見てみますと、プレハブ校舎がたくさん建ってるわけですけども。必要な教室だけ造るっていうよりは、6 年先まで 15 教室が必要だったら、15 教室ぼんと造っちゃって、必要なだけ学校建設公社から市が買い取ってったほうが、校舎校地の有効活用にもちょこちょこ工事やってなくても済みますから、当然いいに決まってるわけですね。だからそういう意味では、非常に有効な方法だと思います。横浜以外で学校建設公社をつくった所があるのかどうかは、僕はあんまり記憶ないんですが、ここにも書いておきましたけど、財政規模が大きな自治体じゃないと難しいんじゃないかなと、書いておきました。実は、この後に出てくる飛鳥田さん以降の道路建設事業団もそうですが、結局補助対象にならないものも出てくるわけですよ。当然人口を見込んでこうやるのですが、6 年先ですから実は、児童出現数がそんなになかったとか、いうことが必ず出てきます。私はもちろん、財政課にいた頃教育委員会も担当しましたので。それこそ児童生徒の出現率の計算っていうのは、学校計画で一生懸命やってました。予算編成始まる前にその数字を財政課と調整するということ、夏休みの時期に僕もやってましたけども。そうは言ってもやっぱり、狂うわけですよ。新しく入ってくる転入者が計画どおり、子ども出現率が 1.5 とか見ても、1.0 の場合もあるし、1.3 の場合もあるということです。その結果として、単独事業として買い取るのも結構多かったんですよ。むしろ私が財政課いた頃なんかは、結構不良債権という失礼ですけど、要するに補助事業にならない、だけど学校の先生がたは余裕のある教室ですから。ここを児童会にしたり、いろんな形で使ってるわけですね。それは当然いろんな余裕の部分は使っていいわけであって、そういうのが補助事業にはならなくても、単独事業で買い取ってくださいという形で、買っていった例がたくさんあったかと思います。そういう意味で、そういうリスクは当然抱えますので、なかなか大きな市でないと、できないんじゃないかなということだと思います。

それから、大した額ではありませんけど、『商品切手税』っていう今のデパートの商品券ですよ。そういうものに対して、何パーセントかだったか記憶がないんですけど、でも多分税収は 1 億円以下だったと思うんですが、そういうとこに商品切手税をやった。障害者の奨学資金の財源にしました。これも全国初だったと、記憶してます。今はやってませんが、僕が財政課にいたときはやってましたね。

それから大きいのが 3 番目の『法人住民税の不均一超過課税』です。これは当時はですね、ご存じのように法人税は、今でもそうですけど、国の法人税の所得割なわけですね、現在ですと国の法人税の収税に対して多分 6 パーセントぐらいだと思うんですが、市町村税は。ちょっと調べないと分かりませんが、当時は 12.1 パーセントっていうのが、

標準税率でした。この標準税率を、制限税率が14.5パーセントですので、その制限税率いっぱいまで14.5パーセントに課税をしました。同時に横浜の場合は、資本金別に3段階ぐらいに分けました。1億円以下は12.1%のままみたいな。3段階に分けた不均一の超過課税をしました。それで自治省から多少クレームが付いたりしてます。要するに不均一ってというのは、問題があるから5年後には見直せ、みたいなことを言われてます。多分見直しはしないで、ずっと来たはずですよ。それでいいんだというようなことができました。用途はですね、木造構築の改築財源でした。これは結局戦後すぐに造った校舎が、全部木造で僕は残念ながら、横浜の方はどういう校舎に入ってたか記憶あると思うんですが、僕は横浜の小中学校に入っていないのでどういう校舎か分かりません。戦後造った校舎ですから、多分あんまりいい資材じゃなくて造ってたわけですから、昭和40年代に入ると、25年ぐらいたって。結構老朽化が激しくなって、改築が迫られる。改築したいけども、新しい校舎のほうにどんどん追われてるわけですから、改築なんかできっこないということで。ずっと伸ばしにきたのを、この財源を使って改築財源にしてやろうということで。これは金額もですね、不均一課税の税収っていうのが40億円ぐらいあったと思いますので。その不均一課税にプラス地方債を充てると、結構な財源になりました。木造校舎の改築は、多分10カ年かかんないで終わったと思います。超過税の使い方を5年単位で、分けていました。10年間、もしかしたら改築財源に充てて、その後は道路に充てたのかと思うんですが。結構10年かからないで全部改築ができたという意味で、大変意味のあった超過課税だったと思います。

これは実は横浜市が発想ではなくて、東京都が発想です。この住民税の超過課税はですね。東京都が『大都市財源の構想』っていう、美濃部さんのときにこの48年のちょっと前ぐらいから、東京都は非常に財政状況厳しくなります。やっぱり法人関係が落ち込むと、非常に厳しくなって、大都市財源の構想の研究會をつくった。伊東光晴さんが近経の経済学者で、大体マルクの経済学者山本さんとかですが、中心になっています。データの的にも非常にしっかりしたもので、この大都市財源の構想の一つが、法人超過課税です。東京都は、もう一つは事業税の超過課税やるわけですけども。大都市財源の中でこういうのを、やるべきだということで提言したものを、受けて行ったんです。現在、超過課税は横浜市はやってますよね。

それからもう一つは、マルク債、外貨債の発行が昭和43年にやるわけですけども。これも金沢埋め立て事業は、既成市街地市の工場の移転なんで、それまで暗黙でやってたような。言ってみれば、先に金を取ってその金でもって、埋め立てるような青田売りはできないんだということで。地方債を起こさなきゃいけない、だけど国内の地方債は非常に足りないから、マルク債。その後、スイスフランス債に変わるわけですけど。これは、多分横浜よりは神戸とかが先で、1年間ぐらい先じゃないかと思うんです。横浜市が独自に動いたのか、大蔵省なり総務省辺りからアドバイスがあったのか、ちょっと分かりませんが。ただ、僕なんかは当時、外貨債の発行なんかすごいなと思うんですけど。考えてみると、そうでもないですよ。関東大震災の震災復興事業で、外貨債は国内で金がないから発行しているのです。そういう意味じゃ、関東大震災の復興に見習っただけの話で、当たり前の話っていえば、当たり前の話っていうか。そっちから見るとそうなっちゃうんですけど、当時の僕なんかは、えーなんて思ってたところがあります。

それから、『市民の森』っていうか、あと斜面緑地の保存とか、こういうのがなんで地方課税が出てくるのかと思うかもしれませんが。鳴海さんの本によれば、緑政局サイドと、敵の財政局長である清水が、いろいろ相談してこういうのを、どんどんやっていったんだというふうに書いてあるので。そういうんじゃ財政局も絡んだのかなと思って、ちょっと書いておきました。私個人は、先ほど財政課の予算の中で、最初道路局、市民局、緑政局というふうにいってました。こういう市民の森とか、公園に整備するお金がどうしてもないという中で開発から防止するあるいは、民地との契約で固定資産税免除でやっていくっていう、のは非常にいい方法だなとその頃も理解してました。そういう点では有効な手だてだったんじゃないかなと思います。



もう一つ話が、話題がそれる点なんです。飛鳥田さんは、いろんなことを、ちっちゃなことで本当にいろんなことをやってんですよね。僕は横浜に来ると、先ほどもこっちに来る前にちょっと1時間ぐらいあったんで、勝烈庵でヒレカツ食べて、歩いて来たんですが。弁天橋のふもとで、弁天橋の親柱なんか、田村さんが一生懸命になってね。へーなんて見ながら思ってたんですけど、右を見たら、横浜通商株式って書いてあるんですよ。あれと思って、実は僕は経済政策課長をやってるんですが、そのときの局長が僕に今から横浜通商のことでマルハニチロにちょっと頼みに行ってくるからってというようなことを言っていた記憶があるんですね。横浜通商って何だったかという、飛鳥田さんがつくったロシアとの貿易会社なんです。要するに、あんまり僕も実態知らないですけど、一応外貨系の団体の株式会社なんです。ロシアから木材だとか、魚とかそういうのを輸入したらいいと、実は中国からもタマネギの輸入なんかやって、タマネギが腐っちゃったりするんですけどね。それが横浜通商だったんですよ。だから当然横浜通商株式会社は、所管は経済局になってたわけで、私もとっくに忘れて。だけど、ロシアとの木材とか、魚の輸入なんかどんどん発展していけば、良かったんですが。あんまり発展していかないから、先々重荷になるということになってきて。マルハニチロにちょっと身売りするか、マルハニチロの株を全部買ってこれという交渉に行くんだよ、経済局長が言ってました。マルハニチロ、横浜通商なんかあったのかと思った記憶があんです。

川股 ということですね。結構そういうね、いろいろやってんですよね。今だから、一面からするとそのとおりなんですよね。地方自治法読んで、地方自治法は、地方自治体がやっちゃいけないとは、何も書いてませんからね。何やってもいいんですよ。やっちゃいけないとは、書いてないから。こういうのは例示として市町村の事務はこうですよ。都道府県はこうですよって書いてあるだけであって。これやっちゃいけないとは書いてないから。カジノやっても別にそれは問題ないし別に、何をやってもいけないということは書いてない。そういう意味では、株式会社をやっても別にそれは、直接やるかっていう問題はありますけど。外郭団体つくってやっていくのは、全然問題がない。

4番目で僕これは全く違ったものの言い方をする人も出てくるのかなと思うんですが、僕はやっぱり財政健全主義っていうのは私はどちらかというと、必要な時期もあるし、必要じゃない時期もあるというような理解をしています。なんでこれほど、飛鳥田さんの市政下では、財政健全主義だったんだろうかっていうのが、ひとつの疑問としてあるんですね。結論から言うとやっぱり、マルクス財政学ですね、飛鳥田さんなんかのマルクス財政学と、財政課が本来的に持っている財政保守主義。要するに入り計って出を制す。入るものがこんだけしかないんだから、出るものはこんだけだという極めて伝統的な財政運営の基本ですよ。これがうまく融合しちゃったんじゃないか。だから結局、ある意味じゃ僕に言わせるとどちらかというと、飛鳥田さんの時代っていうのは、超がつく財政保守主義じゃないかなと思うんだけど。これが成り立ったんじゃないかなという気がするんですよ。当時は分かりませんが、いろんな鳴海さんの本読むと、飛鳥田さんっていうのは自分で『ボルシビキ』っていうか、『オールド・ボルシビキ』っていつてるぐらいで。取り巻いてる学者の方っていうのは、大体マリキストですよ。長洲さんとか、新旧のね。だから、いわゆる飛鳥田さん社会党のときは、左派っていうか、社会主義協議会だったと思うんですけども。やっぱり非常に柔軟だったから、長洲さんとか、今井セイイチさんとかどっちかというと、非常に柔軟な昔のマルクス主義の人だと思うんです。そういう人ともお付き合いになってます。

それから、鳴海さんの財政学のお話も、東大の遠藤湘吉さんだから。遠藤さんなんか、鳴海さんの本によると、汚職したら終わりだによって随分言われた、そこだけは気を付けろと。言いながらも、私たちの記憶によれば、2年とか3年に1回ずつは、この時期はよくあった。

国の動きなんか見ても、そうなんです。戦後の経済復興っていうのは、大体マルクス系の人たちが、そこを支え

てきた。

先ほども言ったように、40年の補正でもって初めて建設国債が出ます。50年で特例国債、『(赤字)国債』を発行する。これだって、ときの大平大蔵大臣だけど、断腸の思いでやった、本当深刻なこと後でも言いますもんね。本当にやったこと断腸の思いでって言うぐらいだから。やっぱりその当時の人は、とにかく戦時インフレっていうか、戦時国債のイメージがずっとあるでしょうから。非常に地方債、国債に関してはやっぱり非常に抵抗感があった、というふうに思います。当然建設国債とか赤字国債とか、そのときは社会党は反対したんだろうとは、思いますね。

その中で見ますと、市長のお小遣いっていうか、市長査定の中で、財源をたくさん用意しておいてね、というようなことを、随分そのときのマスマヤさんっていう財政局長とか、シミズ局長とか、言うみたいなんです。とにかく市長の財源を、隠し作れと、多く作れと言ったら公営住宅600戸の計画を300戸に減らして、300戸の計画にして浮いた財源が必要な財源ですっていうふうに、持ってこられたんで。公営住宅をきちんと造るっていうのも、大きな公約だったはずだから、これはとても駄目だなということで、諦めたというようなことが、鳴海さんの本には書かれています。それで、財政からの必要財源を増やすっていうのは難しいと、言ってる。気が付いたら財政当局の手の内で、市長や鳴海さんは泳いでたんだと。孫悟空の手から離れられなかったんだというようなことを、感慨深げに書いてます。

当時の財務課は一種の名人気質が残ってて、当時の財務課のスタッフを尊重するような。尊敬するようなことで書かれています。そういう意味じゃ、私も当時の名人気質の人だったのかなって。僕が財政課にいて48年ぐらい、まだそろばんでしたのでね。そろばんができないと財務課の職員は、務まらなくて私などはそろばんは下手、字も下手な人間なわけで。そういう意味では、高卒の人が半分ぐらいだったんですね。高卒の人たちは、財政課の職員も14人、16人いて職員の方。半分ぐらいがうまかったですよね。字もうまいし、そろばんもうまいしね。こっちは、とにかく一般会計の総計をそろばんで、打ってかなきゃいけないわけで。間違ったら大変な、皆でやって途中で俺、駄目とか言ってる。最後3人とか4人残るのは、皆そういう高卒のそろばんのうまい人でした。そういう意味では、名人気質だったのかもしれませんが。私も名人気質かという、決してそういうふうな記憶はないので、名人だったからその後予算係長に、戻ったわけじゃないだろうと思うし。町田市市長になった、石阪なんかも財政課にはいなくても予算係長になったわけですから。名人気質だから、財政課の係長になったわけじゃないんだろうと思います。

鳴海さんがもう一つ、この後横浜も企画財政局にてなりますが。東京都が50年ぐらいに、予算編成機能を一体にして、プランニングボードを作りたいんだという相談あったときに、即座に私は反対したと。これが一緒になると、財政が破たんすると言って反対した、と書かれています。

5番目で私も一応財政やってきた人間なんで、私の大学の頃までは、経済学はもちろん近代経済学もやるんですけども。岩波の『現代経済講座』が出てるのが、73年ですね。だから、あまりきちんと読んでないで、うちの書庫にはちゃんと置いてあるんですけども。役所に入ってから買ったんだと思いますけど。基本的に、近代経済学が主流でつくられた、現代経済学講座は、財政政策とか乗数効果だとか、こういうことがきちんと書かれています。この前の段階っていうのは、多分あんまりそういう意味では、財政政策とか乗数効果的なことを狙って、手を打つとか。そういうことは、希薄だったと考えてよろしいんじゃないかなと思います。

実はこのときも、僕は経理係長をやってから、財政課に、なんか財政課の係長が1人増えたんだろうと思うんですけども。財政企画担当みたいな名前が、財政課へ戻るんですがそのときが、タナカさんっていうその後資金課長になる人が、福祉関連で2人で組んで。何をやったかという、長らく市の使用料とか手数料の改定がしてないんで。2人で、もちろん予算もやるんですけど、そういう料金改定やってくれみたいな、ことでやったんですが。タナカさんは横浜の経済大学卒業でしたんで、非常に皮肉っぽく財政課の連中は乗数効果の理論知らないからねって僕によく言っ

てましたもんね。それは最もですね、ときの財政課はそういう経済理論っていうか、経済的な勉強みたいなことはほとんどやってるような雰囲気はなくて。そういう、要するに予算編成でも、財政政策とか経済政策が念頭にあるようなスタッフ起用は全くなかったと思います。そういう意味では上は、入りを計って出を制するグループであった。

次のページで、『厳しい財政事情の演出』っていうのが書いてるんですが。僕はこれはちょっと嫌だなと思うんですが。私の係長の頃、まだ飛鳥田さんの頃ですけれども。どういう時代になっても、財政当局が財政が厳しくない、財政が豊かだということは一度も言うことはないと思うんです。当時も、予算第 1 係長とか財政課は非常に厳しい言い方を各局や市民の方、いろんなパンフレットでも言ってるわけですね。ところがですね、決算をやるとこの段階で、多分 3000 億円ぐらいの予算ですので。決算で、通常であると 40 億円、50 億円の黒字になっちゃうんですね。仮決算っていうのを、3 月の 31 日が終わって、出納整理期間が 2 カ月ありますから。4 月半ばぐらいから 2 回ぐらい仮決算をやるということで、各局から債務歳出のデータ出させて、財政課がそれを集計して仮決算を打つわけです。そうすると 4、50 億円の黒字になっちゃうどうしても。というのは、収入は税が上振れして、税収が増えるみたいなことは時々ありますから。基本的に不要額が、当たり前の話、あるに決まっていますから。不用額が出てくと黒字が 4、50 億になっちゃうんです。一方において財政が厳しいと言ってるにもかかわらずですね。40 億円 50 億円の黒字を出すわけにはいかんと。それを決算調整というふうに言うんですが。オカモトさんが予算第 1 係長でこの頃はですね。オカモトさんの指示の下にいろんな操作をして、1 桁台の黒字にする苦勞をするわけですね。

非常に大きくやるのは、4 月はどうしても地方債への、最後の発行になりますので。結構たくさん発行します。もちろんそれでも国の資金とかは駄目ですから、横浜銀行から借りる銀行債務みたいなものがありますので。これを資金課に言って、発行取りやめにするよと。だから横浜銀行に断ってねっていうようなことで、落とすとかですね。使用料で港湾使用料なんか結構大きかったと思いますので、多分 40 億円 50 億円あるから 1 カ月分だけ見ても 5 億円ぐらいありますので。3 月分は翌年度の 4 月の収入に直すんです。調整し直してねっていうようなことをしたりして、結構そういう操作をしてですね。1 桁台の黒字にするということを、やった記憶が何度かあります。もちろん 50 年度も間に入ってますから、50 年のときは赤字になって繰り上げ需要になりましたから。赤字決算打ってますが、それ以外は多分そういう操作をして 1 桁の黒字にすると、財政が厳しいんだというようなことを、常日ごろ言ってるのが決算を終えてもそのとおりでしょ。なんかばかなことやるなと僕は、腹の中では多少思ってたところがあるんですけどね。でもやっぱりこれが、財政の美学だったのかもしれないですね。財政当局の伝統的財政の美学だったのかもしれない。とにかく 1 桁にきれいになると。厳しさをちゃんと示すというようなことをやりました。

なんでそういうことをしたのかってもう一つの理由がですね。その 7 番目にあるんですけど、『財政調整基金条例』っていうのが、54 年 3 月にできます。このときは、この前年度に私は財政課からめでたくも、係長試験に受かって逃げられるんですけども。地方財政法で財政調整基金をつくれっていうことになってます。地方財政法の 4 条かなんかで、つくれっていうことになってますから。普通は財政調整基金っていうものを、県も市町村もつくってます。どういうことかというと、要はここにありますが、決算剰余金、黒字になりますと 50 億円黒字になったら、2 分の 1 以上、25 億円以上を財政調整基金に積んでおきなさいと。それで、不況になったり、当然変動がありますから。そのときに取り崩して使いなさい。それで、年度間の財政運営の平均化を図ります。苦しいときのために貯金しておきなさいということですね。これが財政調整基金なんですが、これをつくったのが 54 年の 3 月の議会です。時の財政課、さっき言ったオカモトさん予算第 1 係長が僕ら係員にどういうふうに、説明したかっていうと。今まではとにかく財政が厳しかった、だから繰越金が 50 億円は出ないんですけど。決算調整するからせいぜい、1 桁か 2 桁の十何億円ですが。そういう繰越金も、不足も次の 6 月補正とか、9 月補正とかに使わなきゃ横浜市はやっていけない。財政調整基金積んで 2 年後

3年後に苦しくなったら使おうとか、そういう余裕はないんだと。だから今までは繰越金、決算剰余金はすぐ使ってしまうので、財政調整基金は必要なかった。でもやっと財政調整基金をつくって、少し積んでおくことができるようになった。だから、財政調整基金条例を作るんだと、というような説明をしてました。こっちもあんまり勉強その当時はしてなくて、財政調整基金っていうのを早くつくっておくべきだとか。他の自治体がこうなって、うまくやってるなとか、そういうことをあんまり知らなかったんです。

それで、横浜市は超健全財政保守主義だったと言いましたけども。神戸はちょっと違ってたんですよ。この段階から僕は多少本読んでたりして、思うんですが。市長の宮崎さんは、この人も旧内務官僚だったと思うんですけども、満州の奉天とか、瀋陽なんかの街づくりやった人じゃないかと思うんです。戻ってきて、何年後かに市長になって。高寄昇三っていう、神戸の研究所の所長さんで財政の専門家ですけど、引き入れた。この人たちが、結構地方債とか外郭団体の活用をし、神戸はいろんな都市経営を行うわけですね。僕が印象的だったのは、要するに市税収入のほうは、地方債の利子が当時多分5パーセントとか6パーセントだと思うんですが。市税収入はそれぞれ、団体によって違いますけども。横浜なんかは20パーセント近いとこもあったと思います。市税収入のほうが多いんだっただらば、国の補助金なんか待たずに、借金してぼんぼんやっちゃったほうが得。だから単独事業で下水道事業なんかは、国の補助金が出るのを待ってるよりは、単独事業でもってやっちゃったほうが、よっぽど得なんです。それで整備するのが、神戸のやり方だったんですよ。僕はへーと思った記憶があるんですけども。だから、飛鳥田さんのこの時代でも、神戸のやり方は相当違ってたやり方してた。

田口 こちら辺でちょっと、いったん休憩にしますか。

田口 再開いたします。

川股 はい。あとちょっと聞いていただきたい、と思います。僕は在職中に酒の場だったからあんまり具体的でなかったんだけど、入江さんから何とか、地方債の活用がもっとうまくできないのっていうことは、言われた記憶があるんですよ。やっぱり入江さんは予算編成で飛鳥田さんや鳴海さんと一緒に、予算書の冒頭の部分の原稿書いたりするので、地方債もって活用して、財政拡大できるんじゃないかっていうことを、私に言ったことはありましたね。

それからもう一つはですね、これは僕は多少ショックなんですけども。53年に細郷さんが出馬するにあたって総務省が、県の市町村課に横浜の財政分析をさせてるんですよ。私は係長になって、それこそ財政がそろそろ嫌だなと思って早く係長試験受けてうまく受かって、どっかへ出られると思ったら実は、わずか4メートルぐらいの人事異動で。財源担当の市債担当になっちゃって。その財源担当の市債やってるときに、県とも多少いろいろ仕事上はありましたので。とのときに、ヤマムラさんという県の総括主幹がいて。その人が市町村の交付税とかを、担当してたんですよ。横浜市は除いてですね。県が国に報告するときは、横浜市も中に入るんで、そういう意味で連絡取って。私の大学の先輩だったこともあってですね、いろいろ親しく付き合ったんですが。その選挙が終わった後の夏に言われました。要するに、調査の指示があったと、あまりにも横浜市が財政健全なので驚いたと。とにかく、特に総務省は美濃部さんをやっつけるために、結構地方債の許可に関して、いろんないやらしい策を何回かやってるんですよ。地方債を許可しなかったり。逆に言うと、革新市政になったらばまき市政をやって財政状況が悪くなる、というのが事実上の一般的な見方だったわけですね。その代表格が東京都だという見方でしたから。横浜市に細郷さんが出るにあたって、身辺調査しておかないと危ないなということで、県に調査させたらとにかくあまりにも財政健全なんで驚いたと。

いうことをヤマムラさんは、私に、川股ここだからよという話で言われまして。僕は何となく分かってはいたけども、県にそこまで言われるほど、横浜市は良かったのかなというふうに思ったことがあります。

ということで結果としては、飛鳥田さんの 15 年間の中で蓄えた財政余力というか、財政的な余裕ですよ。地方債はあんまり使わないでいった余力は結局、細郷さんに全部財産として、移ったということになるんですね。それだけ余裕があるから、地方債の発行もたくさんできるし。いろんなことができるということになります。その仮設がある意味では、六大事業なんかもそうなんだけど。大きなプロジェクトもそうなんだけども、財政的な余力の部分も含めて、細郷さんに移ったと、だから細郷さんはいろんなことを、極端に言うと、金に糸目を付けずにやれたと。いうことになってくと思います。

非常にここにもちよっと書いておきましたけど、下水道普及率を毎年 4 パーセントアップさせる、12 万世帯以上に普及させていくってことですね。極端な話 1500 億円使いましたからね、下水道の建設費だけで一番ピークは。だからこれは、金近さんがいろいろ動いたんだと思うんだけど、道路建設事業団をつくる点で、私なんかもだいぶ協力をしましたし、遅れてた環状 2 号線も、道路建設費用でやってもらって。それで、後から回収というようなことをやったと。六大事業も一部完成したし、最近、時に話題になる新横浜のアリーナを一生懸命無理して土地を買収して、竹中工務店でしたよねあれね。設計施工一体で早く造った、横浜美術館も造る。パシフィコ横浜もやる、横浜博覧会もやるということで、本当にたくさんやりましたっていう感じでした。それだけ余裕があったんですね。僕も自分で予算第 2 係長やって、予算第 2 係長が収支を全部やりますから。そういう意味では、どこに金があってどこに、金がたまってるかって大体分らないと、予算第 2 係長できませんから。全部 3 年間予算第 2 係長やりましたんで。

それからもう一つ飛鳥田さん、あるいは田村さんの財政運営の特徴の中で外部資金活用が、あると僕は思ってるんですね。僕はもう一つこれが分からないところが、あります。これはできれば皆さんからも、いろんな意見が聞きたいなと思ってるんですが。事例的に挙げてみますと、ハード系の方は、六大事業を横浜市の骨格をつくるということで。飛鳥田、田村が出したというのは、非常に意義があるというふうに理解しているし、それに異論はないんですが。僕はねもう一つね、方面別病院の八病院構想をつくって、上下分離っていうか土地や建物は市が、運営は民間がっていうような形でやってた。これも飛鳥田時代から始まっているんですね。済生会南部病院から始まっているんですが。これはやっぱり横浜にとって非常に大きな、意義があったなというふうに思ってます。

それからシーサイドラインも三セクだったし、きょうのテレビで言ってた横浜スタジアム、40 年たったと思うんですが。それも市民株主を募集して、やりましたし。先ほどの新横浜のアリーナも、市が土地を結構一生懸命になって買収しましたけれども。株主は、キリンと横浜市が。キリンが筆頭株主ですよ。だから社長さんはキリンからでてるはずですが。六大事業もそうであるというように、結構いろいろやってんですね。特に病院なんかについて、公設民営型みたいなこと言ってくるのは、どっちかというところ 15、6 年ですよ。それ以前はほとんど行われてない。全国的にも行われていないようなことが、昭和 40 年代の後半から行われていたというのが、非常に特徴的だったと思います。こういうのは、僕は経営原則が横浜市にあってやったのか、ある程度、場当たりのだったのか、何だったんだろうなっていうような、よく分からないですね。正直言って、経営原則的なものがあってもあんまり思えないんですよ。方面別は、5 病院プラス、港湾病院だった病院がみなと赤十字病院に指定管理者に変わったという意味で、民間型になった。基本的には上下分離方式ですよ。病院はやっぱり横浜っていうのは人口が多いので需要のポテンシャルが高いですから。そういう意味では、民間が来ててももうかるということはあったんだと思います。

それから、シーサイドラインなんかも、とにかく横浜交通労組が、飛鳥田さんの一番最初のときの、選挙母体なんですよ。横交が全部用意してくれたから、左うちわで選挙やれたみたいなこと書いてあるんだけど。だけど、1 次、2

次の交通再建でもって衰退しますから、シーサイドラインも多分横交は、俺たちにやらせろとか、そういうこと言わなかったと思うんですね。

それから田村さんの本読んでも、市税っていうのは教育福祉に充てるべきであって、六大事業とかそういうものは民間活力でやるんだとあってあるけども、教育福祉が特段良くなったのか、と言われるとそうも言えないよねっていうような感じがします。ただ、福祉に関して横浜市は非常に僕は熱心だったと思います。これは非常に特出すべきことだなと思うんです。専門職で取ってますよね、福祉局は社会福祉士でね。だから、ケースワーカーの人とか児童養護とか、そういうような社会福祉専門職で取ってきてるから。彼氏彼女は専門職だから、技術職の人が熱心であると同じように、非常に使命感に燃えてやるんですよね。一般事務職よりはね。それに促されて、事務職、法律とか経済出てたやつも、やっぱりバックアップをせざるを得ないというか。そういう意味では非常に福祉関係は、しっかりして僕らの段階からいまもそうだと思うけども、しっかりしてたなと思う。もう一つ面白いのは、結構 OB 局長とか部長とか辞めた人が、社会福祉法人のいろんな役職に就いて結構頑張ってますよね。入江さんなんかもそうだし。それともう一つ大きいのは、鳴海さんの友達で、入江さんの先輩にあたるんでしょうけど。飯田進さんっていう方の存在です。戦後戦犯で巣鴨に行って、巣鴨の中で新聞なんか発行してたみたいですけども。廃棄物処理業みたいなのをやってたんだけど、子どもがサリドマイド児だったんですね。赤い鳥保育園か、なんか社会福祉事業、子どものために始めて。彼氏がすごく横浜の福祉局を引っ張っていきますよね。去年ぐらいかな、亡くなって。95、6 歳で亡くなってると思うんですけど。朝日新聞なんかの、ときの人とかいろんな番組にも載った人。非常にこの飯田さんの貢献っていうのは、大きかったと思います。そういうことで、若い職員からそういう OB 民間まで含めて、結構いいチームが福祉はできてたなと思います。教育はどうかな、という疑問があるんですけども。

それと、飛鳥田さんの大きいのは、松下圭一なんかすごい批判しますが。やっぱり役所とか役人に対するシニシズムっていうか、それが強くありますよね。要は、役所の改革とか何とかっていうのは、当たり前だけのおまえだと言ってないか、最後の最後全部に包囲されて始めて国の機構なんて改革できるんであって。それまでなんか、いろいろやっちゃって改革なんてできないんだよっていうようなことを、鳴海さんとの対談で言ってたんだけど。僕らサイドから見ると、もっとやとくべきだった。つまり逆に言うと、病院経営なんか、経営が下手くそな人に任せるよりは、民間病院に任せたほうがいいと、いうふうになってるのは、感じます。とにかく僕は、いろんな形で民間資金、民間の能力ノウハウはいろいろ使った、というのはよく分かるんですが。何がそれだったのかっていうのは、正直言ってよく分かりません。なぜそうなったのかっていうのは、金がなかったということでは、必ずしもないと思うんでね。金がないっていうのは、確かに表面的には言ったけども。多分財政局が、金がないからできないって言って、大きなプロジェクトを拒否したっていうことは多分なかったと思うんです。

もう一つ逆に先ほど神戸の例も出しましたけども。民間活力を使うんだって、本気に考えるならばヤミ起債使ってもですね。文化施設みたいなものを、早く造ることはいくらでも可能だったんですよね。この当時ヤミ起債っていうのは、どこでもやってたんですよね。ヤミ起債は……。

川股 本牧プールとかの埋め立て事業で海を奪っちゃったんでプールを造ったりするんです。そこの経営っていうのは、財団法人である福祉文化事業団だったと思うんですけど。これがやってたんですね。ここが例えば、文化施設を造っちゃって。そこに、要するに銀行から借りて造っちゃって。20 年かけて横浜市が毎年補助金出して返しちゃう。返し終わったら、横浜市に施設を返しちゃうっても構わないし、福祉文化事業団が持っても構わない。だから、言ってみれば国から本来借りる地方債を、この財団法人をかましてそこが、負債をするみたいな形です。多かれ少なかれ

ね、このヤミ起債はやってたんですよ。横浜市だってやるんですよ。後になってみればこれに近いことは。例えば産業貿易センターなんかだって一部はそうです・・・。

―― 後になってっていうことは、どういうことですか。後になってやるというのは。

川股 飛鳥田さん以降も、やるんですね。産貿センターなんかだって金が足らなくなって、とか。あそこの情報文化センターなんかで、そういう形で補助金出してやるっていうことが。

―― でもほとんどが持ってたでしょ。そういう場合。

川股 債務保証を負うというよりは、補助金を出すということでもって。

―― ほとんど債務保証、結局ヤミ起債と同じなんですよ。

川股 いやそれはね、ちょっと違うんですよ。それはまた後で。

―― 原理的には一緒ですよ。だって、会社は金なんか持ってないわけだから。

川股 だから債務保証は別にいいんですよ。だって、保証するだけだから。それは一般的だからね、債務保証っていうのは最初そういう契約をするのは通常ですよ。

―― いや、それで返さなきゃいけない時期が来たんです。僕の記憶の中で、どう処理するんだっていうのがあったの。

川股 それの大きな問題はね。後で出てくる、土地開発公社ですよ。大問題は。

―― 実は事業団も全く同じことを・・・。

川股 そらそうですよ。

―― やらされてますしね。結局道路局としては、金のない中でどう処理するかっていうのは・・・。

―― 結局毎年100億ずつとか20年とかいらないでしょ。つくったんですからね。それはヤミ起債と一緒にですよ。債務保証をするっていうことは。

川股 だから、道路建設事業団なんかは、ある意味ではヤミ起債でしょうね。だから学校建設公社つまり補助金が入るといふことの、違いだけでね。補助認証があるという違いだけでね。でも、文化施設やろうとはしなかった。

— なるほど。

川股 そこが大きい、つまり本当に遅れちゃったのは文化、芸術そっちの分野なんですよ。本当に、今でも遅れちゃってると思うんですが、そこはやんなかったということ。

— 文化芸術、それはなぜ。

川股 それはちょっと、皆さんで考えてほしいなと思って。

— 一つ考えられるのが、東京にやっぱり近いことなんですよ。

川股 それは当然ある。後で議論しましょう、それはね。それから 7 番目にちょっと僕が書いてある、論文を後で読んでください。58 年で僕が、財政課の係長が市債のときに書いたやつです、結構これはときの調査季報を担当していた岡村さんが皆に言って。とにかく人事とか、財政とか幹部は調査季報に書きなさいと。そのとおりになんだよね、バックナンバー見ても書かないんですよ誰も。財政課も書くことになって、財政課長がおまえが書けということで私が書いたやつです。そういう言い方すると、ちょっと自慢気になっちゃうけども、結局書くのは僕ぐらいしかいなかったってことなんです。

僕が書いた論文の前は、入江さんが企画財政局長で、入江さんと神奈川新聞が対談してます。その後に僕の論文になってると思います。このやつでちょっと面白いなって、僕はそれについて、市会で質問されたんですよ。こんな市の財政を批判するような論文を載せるのはけしからんって言って。僕が質問されたわけじゃなくて、入江さんが質問されたんだけど、私も一番後ろのほうに財政課の端くれで、係長でいたから市会で聞いて、嫌だなって下向いてたら、これは個人の論文ですので、こういうことでいいんですって入江さん答えてましたけど。財政課も夏になると暇になるからあっちこっち遊びまわってたんですけど、そういうとき課長さん方がよく読んでたと思います。それまで要するに財政は厳しいとか、何とかいろんなことは言うけども。横浜の財政トータルがこういうイメージだなというのはない。書かれたものがないんですよ。予算編成方針だとか、予算書だとかって言うことがあっても。厳しいと言ってるだけで。これは一応他の都市との比較や、どこに問題があるというのは多少、言ってるはずですので。よく読んでたという僕は印象を受けてます。

それで僕が意図してるのはとにかく、大阪の人口も超えるんだから、大阪を超えて神戸の都市経営に学んで欲しい、事業局が要するに財政局が、いくら財政予算拡大してもできないんで。意欲を持って事業展開して予算要求してほしいと。財政課っていうのはそういうことでの調整役であるし、財源をどこから持ってくるかっていう財源調達役だというふうな僕の係長としての考え方でした。そういうことを書いてるはずですよ。私自身はちょうどこの頃に、自治省が創設した地域総合整備債っていうのができましたんで、街づくり地方債とかって呼んでましたけど。これを使って結構道路局ですと、魅力ある道路事業だとか、ちっちゃいって言えば、ちっちゃいんだけど。建物も結構造ってあるもんですね。河川のいろいろなアメニティー事業とかいろいろ、やらさせていただきました。

それから、もう一つこれはやっぱり飛鳥田さんと言えば、田村さんの功績であると同時に横浜市としては、結果としては大きな問題を生んだ問題だと思います。土地取得の問題ですよ。先ほど、五大戦争がありましたように。公共



用地がとにかくひどかった。そういうこともあって、多分田村さんが提案したんだと思うんですが、土地取得の調整会議で関係局長、企画と財政ともう一人ぐらい、とにかく局長が集まって即決で決めちゃう。土地情報があって、関係局からこれを買いたいってあったら状況を調べて、それでいいっていったらそれで稟議なんか回さないで、稟議は後から回るんだけど。買うというふうに決めちゃうというやり方です。それがうまく運用してくと、同時にそのためには用地先行取得資金が必要ですから。国なんか昭和 44 年ぐらいから、動きだして土地開発基金を、地方交付税で措置をして全国につくってというふうに言います。横浜も 40 年かなんかにつくって、宅開要綱の途中から公益用地はここで買うというルールにして買っていきます。多分ピークは 2000 億円超えたと思うんですね。今でも 1400 億円ぐらいありそうだから、ピークはこの土地開発基金の現金と土地は 2000 億円超えたと思いますね。

それから用地会計っていうこれは、昔からあったやつです。用地の先行取得会計、これは多分 300 億円前後から 500 億円ぐらいだと思うんですが。あと国の国土交通省というか、建設省の制度で土地開発基金じゃないですね、これ土地開発資金ですね。ごめんなさい。

## ―― 資金？

川股 資金ですね。これは大した額じゃないと思います。資金ですよ。これも建設省の補助事業でつくったやつ。それから土地開発公社、これも公有地拡大推進法ができて、48 年。これは僕もちょうど財政課いったときに法律ができて。県の説明会があって、係長と一緒に夏の暑い時期に説明会に出た記憶がありますので。ちょうど 48 年にできた内容です。これは大規模な公共用地、下水用地とか大規模な公共用地を買うということで、これも多分ピークは 2000 億円超えてるし、後で問題を起すわけですが。だから、多分全体で 5000 億円ぐらい、ピーク時は 5000 億円超えた取得財源が、もちろん土地に変わっちゃってるものもありますけども、あったと思います。やっぱりこれだけの公共用地先行取得の充実がされてると、これは僕が言うよりもそれこそね。実際にやった人が、そうかと思うんですけど。結構街路であれ河川であれ、スムーズにいったんじゃないかと思います。僕も下水道、最後経営企画部長で行ったときには、下水の用地っていうのはほとんど全部買われてました。下水処理場造るにしても、何つくるにしても何の心配もなく工事予算さえ取れば、着工できましたから。それでもなおかつ余った用地がたくさんあったぐらいで、子どもの野球場に貸したりなんかしてましたけども。そのぐらいたくさんありました。そういう意味では、大きく貢献をしたと。

だけど、5 番目がなんだけど。金近さんが中心に私が、総合計画課長の頃平成 4 年、5 年だと思うんですが。国鉄清算事業団が土地を売る、JR 関係の職員なんか横浜なんかに来ましたし、JR を解体して清算事業団が土地をもって、清算していく中で、高島町の土地も横浜市に一括売却したいというようなことで、横浜市はこれを買うわけですね。値段がいくらだったかとか、どうのこうのは忘れちゃったけど。多分、2000 億円は行ってないけど、1500 億円は超えたんじゃないかなと思うんです。その後ご存じのように、土地は大暴落するわけですね。その大暴落の結果として、多分 3、4 年前に土地開発公社は 1300 億円の損失を出して破産終了した。要するに 1300 億円を横浜市が、起債発行して横浜銀行なり債権なり全部渡したということですよ。土地は残ってるわけですから、それは全部市有地にしたと思いますから。今から値上がりする可能性はあんまりないんでしょうけど。これは僕もちょうど総合計画係長で、総合計画やりながら金近さんが一生懸命にこの土地の取得で動いてたことは、よくよく覚えてます。1 年からすると、いいのかなという気持ちが無きにしてもあらずのところは、正直に言ってなくはなかったんですけども。

だからやっぱりこの辺になると、反省にもなるんですけど。やっぱりとにかくいけいけどんどんになっちゃうんだよね。高秀さんはね、総合競技場のときもそうだけでも。だけど、これを歯止めかけられなかったという。だからこの高島町

の土地もそうだったと思うんですが。結局こういうことに、つながったと。従来の、つまり飛鳥田時代の先ほどの民間活力みたいなことを考えれば、民間活力を使うというのは、違った面から見るとリスク分散なんですよね。考え方として出てくるのがね。全部リスクは取れないと、横浜は。半分は取るのは仕方がない、半分しか取れない。だから民間に移すんだみたいな言い方ですよね。だけど高島町は全部買っちゃって、買っちゃった後に、民間不動産にすぐ半分ぐらい売っちゃえば良かったのかもしれないけど。リスク半分取るんだったら、それはしなかった。というかりスクを全部取っちゃった。その結果としてこういう結果を招いたんじゃないかなと、いう感じがします。

それから9番目は、これは飛鳥田時代からは離れますけども。私が『ゆめはま 2010 プラン』の総合計画の課長でしたんで、この時期っていうのは積極財政からの転換をどう図るのか、もちろんこれは高秀さんの1期目の最後です。2期目に出馬するに当たってのプラン作りという、要素もありましたのでね。ただ、僕は一番最初に田村さんの下で、総合計画作ったので、どういうふうにして事の決定を踏まえると、どういうふうにして積極財政から成熟期に、どう転換するのかなっていうのは、僕の課題だと思って相当意識してやっていたんですけども。正直言って、結構難しかった。後になって鳴海さんからやっぱり、おまえ大風呂敷だなんて、言われてだいぶ批判をされました。ただね、個人的に言わせてもらおうとね、下水道局でばかな話だけでも、自分で経営企画部長になって、下水道料金の値上げするんだけども。こんとき若竹さんが局長だったんですよね。下水道もピークからはちょっと下がってたんですが、それでも1300億円ぐらいの事業はあったけれども普及率が85パーセント、80パーセント超えてたんで、転換させなきゃいけない。1300億円ぐらいの内の、多分補助事業が500億円ぐらいで、単独事業が800億円ぐらいだったかもね。とにかく、単独事業減らせなきゃいけないっていうことが、いろんなデータ見て分かったんで。僕は若竹さんに言いに行きました、係長と一緒に。恐る恐るこういうふうになってるから、下水道は転換しなきゃ駄目だと、いうことで事業をペースダウンしてくれと、言いに行きました。同時に、財政課長が深川だったんで、深川っていつでも財政課と机並べてたこともあって。財政局長査定前に、局長査定で大体固まっちゃうんで、査定前に下水道の単独事業を100億円落としてくれと、落としてペースダウンしないと、後々後悔するよと、言いに行きました。でも結果として50億円をプラス、市長復活するのですね、あの頃は自民党とかなんか、内示してましたんでね。自民党筋から、建設業者が言ってるから50億円単独事業プラスしろって言われて、プラスしたとか言ってきて、結局そうなるんですよ。直接的な利権じゃないけども、少しずつ絡んでるから。特に下水の単独事業っていうのは、ちっちゃな業者さんでも面整備ですからね。やっぱりそういう人たちの事業が必要だなみたいなことを、自民党から言われると、こうなるんですよ。そういう構造ができてくるんですよ。

もう一つは、結構この段階でもっていろんな文化施設、箱物施設が遅れてましたんで。そういうのは結構乗せざるを得なかったということと、ただその次のページにちょっと書いてあります。もう一つ僕印象的だったのは、五大戦争の中にごみっていうのがあって。どんどん横浜市、清掃工場造っていくわけですよ。この段階でもって、清掃局っていうか環境事業局のほうから、企画課長誰だったかちょっと忘れちゃったけども。港南工場を廃止したいと、いらぬ過剰になってる、言ってきました。僕は、ノーって言ったんですよ。廃止するのはいつでもできるよと、だけど清掃工場と火葬場はいかに先輩が苦勞してつくってきたかっていうのを、僕が言うのも変だけど、よくご存じでしょ、そういう意味ではいつでも廃止できるから。総合計画では触れないでおきましょうというふうにした記憶があります。後でどんどん廃止にしていくわけですが。そういう記憶があります。ということは、この段階でもって言ってみれば、人口増とか、経済成長とかに伴って、増えているごみは、完全に頭打ちになって減り始めたんですよ。そういうことの象徴だったな、というふうに思います。ちょっとこの中にも書いておきましたけど。あんまり僕は公共投資額8000億円とか、威張ってましてこれは東北六県の投資額に、横浜市は匹敵するんだとか、ばかなこと言って総合計画課長も予算査定の

最後には出てましたんで、聞いてましたけども、そういうことがありました。

それから、地方自治体の役割と財政規模っていうのは、ちょっと簡単に言うておきますと。やっぱり飛鳥田さんの時代っていうのは、ある意味で生活環境、義務的な生活環境を象徴する、そういうもののミニマム行政なんですよ。だから、そういうことだけに向かったことと、やっぱり都市の発展段階っていうのは基本的には投資的な経費がぼんぼん多くなるけども、その後は経常的な経費っていうか移転的な経費っていうか、不用品みたいなものがどんどん多くなると、いうふうな構造になります。やっぱり多分その頃の、市民のいろんな要望とか見ても、学校とか保育所だとか道路直せだとか、ごみをちゃんと収集しろとか、そういうことであって。やっぱり文化施設とか、何とかっていうことじゃないんですよ、やっぱりね。だからそういうやつに、応えていく。やっぱり扶助費とかなんかも、生活保護はちゃんとやりますけども。それ以上ではあんまりない、あと高齢者は高齢敬老パスみたいな。やっぱり若い人たちが多いし、若い人たちはやっぱり経済的負担が大変だけど、夢があるしね。先々は収入が増えるっていうのは、30代でローンたくさん抱えたって、ちゃんとそのうちに返せるって思って、子どもも育てられるって思ってましたから。そういう意味では、負担が少なかった。市のほうの負担もなかったということじゃないかなと思います。だから、僕が先ほど書いたやつでも大阪なんかを見てもらうと、大阪とか京都は結構扶助費とか福祉関係は多くなって、生活保護者も多かったこともあります。

それから、全体的に見るとやはり、公共施設のほとんどが更新投資に変わってると思います。とにかく上水道は95パーセント以上が、ほとんど規模を縮小しての更新投資だと思うし、一般会計の70パーセントは更新投資じゃないかと思ってます。だから、こういう更新投資をどういうふうにやって、都市を持続可能にしておくのかっていうことだと思うんですが。今決算の12パーセントぐらいが投資経費なんですよ。僕はもうちょっとしておかないと、15ぐらいのかなと山勘でなんですけれども。ちょっと12パーセントは低いんじゃないかなという感じがしているところです。その後、経常収支っていうのがちょっと出てますが、これはこのままで見ていただければ、いいかなと思います。

とにかく今は高齢化、僕らも含めて高齢化。それから経済格差の拡大、全体として貧困化という流れの中で、医療・福祉関係がとにかくどんどん増えていく。国保会計、介護保険の会計、子育て、障害者福祉、とにかくこの辺が全部市町村の事業です。今度国保は、今年ぐらいから何年かかけて、県が中心になりますけども。市町村でやってられないということもあって、県がまとめるみたいになります。とにかく、こういうふうにしフトしていくんだということと、僕はちょっと役所辞めて54で辞めて早期退職して、福祉関係の仕事にちょっと関わったことがあるんですけど、そのとき若い職員が、25、6の人が結婚するんで公団住宅に住みたいだけ、公団住宅の入居下限に合致しないんですよっていうんだよね。僕も昭和46年に入って7年にとにかく、6畳一間の大学生生活と同じじゃ困ると思って、妹と洋光台の1DKに移るんですが。要するに、先ほどの彼女っていうのは2人の給料合わせても公団URの入居基準の下限に達しないというんだよね。

―― 下限にね。

川股 下限に。僕なんかむしろ、上限だと言っちゃってね。2人足しても駄目だって。そのぐらいやっぱり貧困化っていうか、若い人たちの貧困化が進んでいるのを、あらためてそのとき感じましたけどね。だから、多分公務員になってる人とか、一流企業に入ってる人たちはいいのかもしれないけども。派遣とかいろんなところ、給与格差は非常に厳しい。そういう社会に変わっちゃってる。だから、横浜で保育に関わってた僕なんかの同期の女性に聞くと、保育所を造れば造るほど足らなくなるんだという言い方をしたけど、当たり前なんですよ。保育所を造って入れるようになれ

ば、2人働いて何とか所得を高めよう。だから、どんどん働けるチャンスがあれば預ける。そういうふうで、所得を確保しなきゃいけない、と変わってますから。保育所は造れば造るほど足らなくなるんですよ。そういう構造に変わっちゃったと、日本の社会を理解しないと、いけないんじゃないかなと思います。

それから、その後はちょっと個人的な感想に近くなるんですが、どっちかという。僕は、MM21はなんで公団施行であって、市の施行にしなかったのかなという疑問を持っています。経済局にいて経済政策課長やって結構幕張を何度か行く機会があって、横浜博覧会なんかをやっちゃったから、そのとき時間が2、3年ずれちゃって皆幕張に行っちゃったな、と思ったんです。よくよく考えてみると、市の施行のほうが、経費がどうかは分かりませんが、迅速にいろんな意味で対応できたんじゃないか。柔軟性が確保されたんじゃないか。経済局にいて、やっぱり企業誘致、野村総研さんと一緒にいろんなこと、あの頃やってましたから。新しい土地には、新しい企業を呼ぶ。それが肝心だ、みたいなこと言われましたけども。やっぱり経済の中心性が弱い以上は、待ってるしかないんですよ。横浜はね、きつとね。用意しておいて、待ってて経済循環から、景気が良くなって東京があふれてきて、いいものを欲しいなと思ったときに、横浜でもいいかっていうようなことだと思うんですよ。そういう意味では、待ってなきゃしょうがない。待ってるには、やっぱり土地造成して基盤整備はある程度しておいてっていうことになると、公団さんよりは市が金かけてもやったほうが、良かったんじゃないかな。なんでそういうふうにしなかったのかなっていうのがひとつ僕の感想です。なぜそういう感想を言うかという、経済政策じゃなくて。下水道の経営企画部長のときに、料金改定をやって、なるほどこれが国の仕事かと思つづく思ったんですが。未稼働資産があつた頃、横浜下水道は3兆円ぐらいの資産があつたんですね。だから結構大きいんですが、3兆円っていうのは。借金が1兆3000億円あって、未稼働資産要するに建設仮勘定にして、まだオープンにできないようなやつが2000億円ぐらいあつたと思います。もつとあつたかもしれません。年間700億円800億円事業をやってるから、そのぐらいあつてもいいんですが。でもちょっとやっぱり議会との対応の中で、2000億円超えるの心配だなと思って、経理課長さんに未稼働資産の一覧表くださいって言って、心配だから出してもらって見てた。見てたらですね、国道15号線、1国っていうかその下にずっと共同溝があつて、鶴見の末広の下水処理場から、南部下水処理場まで共同溝をずっと造ってるんですね。その中に、下水の汚泥圧送管が入ってる。僕は非常に感心しまして、汚泥圧送管をそれが25年ぐらいかかっているんですね。25年前から横浜市下水道局の先輩は汚泥をちゃんと圧送して、金沢下水処理場まで持って行って、消化タンクでやるっていうような構想持ってたのか。25年前からそれ持ってたのすごいな、と思って感心したんですけども。よくよく考えてみたら、そんな頃に汚泥のタンクなんか考えるわけないんであって。それこそ金沢埋め立てが始まってない。よく見たらですね、南部下水処理場に持って行く計画なんですね。ということは要するに、し尿と一緒に東京湾に捨ててましたから、下水、汚泥は、当時は。その圧送管なんです。下水用で消化タンクに持ってくんじゃないで、金沢の南部下水処理場の所に清掃工場もあって、そこから汚い船が出てました。その汚い船に汚泥も昔は詰めて一緒に東京湾に捨ててました。そこにタンクローリーで持って行くじゃなくて、汚泥圧送管で持って行くっていう計画だったんですね。だからそれが25年ぐらいかかってやって、まだ磯子の手前ぐらいまでやってるわけですよ。僕はその共同溝の事業を見て、嫌になっちゃってね。共同溝に汚泥圧送管の鑄鉄管が入ってます。あと5、6年たったらそれ使えるのって言ったら、嫌多分もう駄目だと思つて、冗談じゃない。要するに国の仕事ってそんな仕事のやり方してるんだなと思つてました。

田口 今のをもう少し分かりやすく、言うと。25年前の計画で、ずっとつくってきたけど……。

川股 鶴見から始めてるから、鶴見からずっと鶴見の国道1号線の拡幅に合わせて、共同溝入れてきてるから。永遠

と僕がいた頃には、横浜は大岡川超えて磯子に近づいてたけども、25年ぐらいかかっているわけでしょ。

川股 毎日、毎年2キロぐらいそこやっているから。そこに共同溝が入っているわけだから。そこに汚泥圧送管も入っているわけで。汚泥管圧送管もついでに一緒に入れてるわけですよ。

川股 でも25年もかかっているから、完成したときには使えなくなっている。こんなばかな・・・。

川股 だから、そんなばかな計画を進めるのかねって僕は、そういう印象があるので。やっぱり柔軟性を保ってきちっとやるっていうならば、民間活力ということでもって。ニュータウンは公団で、住宅系はいいと思うんだけども。事務所を誘致するんだったら、やっぱり市が施行するべきじゃなかったのかな、というような感じがするんですね。この辺はちょっと皆さんにいろんな意見があるでしょう。

もう一つは、街づくりの後退みたいなのが、結構あるんじゃないかなってというような感じがして、仕方がないようなところがあります。僕が筑波ぐらいしか見てないってということも、あるんですけどね。ぜひそのうち筑波も、見てほしいなと思うんですが。筑波なんか、公団が研究学研都市としてつくった部分っていうのは、公団施行でやっていますから。結構立派なんですけど、ニュータウンと同じようにBOOK堂なんかもあって、立派なんですけど。その手前のTX沿線の公団施行と茨城県の公団施行なんかひどいな。僕なんかから見ると、ひどいなというふうに駅前広場であれね、緑道なんか全くないしね。このレベルは何なんだろうなということと・・・。

川股 クオリティーが低い。公団の部分は立派だと思うんですけどね、あそこの公務員宿舎の所を中心としてね。それから、公務員宿舎がどんどん廃止になってますから、全部民間に売却してありますが。それも10階建てぐらいのマンションが、高層マンションが、この作り方もいかなもんなかというのになってますね。そういう意味では、非常に僕から見ると、筑波が一般的なのかどうか分かりませんが、ちょっといかなもんなかという感じですよ。

それから14番は、いわば飛鳥田さんとか鳴海さんとか田村さんがやってきた中で、必要ならば法規を超えるみたいな、行政ですね。高い意欲も含めて、気になる政策法務みたいな形で、職員研修なんかでは、言われてんですが。やっぱりこの中でイノシシの事例とかですね、地下水の採取と自家用専用水道の問題なんかが出てますけど。やっぱり僕も、向こうのほうに行っちゃってますから、あんまり横浜とか個別の自治体のことって、あんまり分かんないんです。地元のつくばとか、そういう見ている中ではやっぱり知恵を働かせるとか、技術的な工夫でもってみたいなことでうまくやれる法律をうまく解釈するなり、うまく脱法的に使えばいくらでもいろんなことが、できるのになかなかそうやってくれない。やっている事例もあるんですが。そういうことの大切さみたいなものも、思います。

それから、横浜市方式って言われた公害も含めたものの中では、やっぱりむしろこういうものをきちんと、全国の各自治体が積極的にアピールしていった。そういうことによって、地方分権とか言ってもなかなか実態はね、どうなっているかっていうのは非常に問題があるわけで。そういう意味じゃそういうものを、定着させていくっていうことの中では、公約の積み重ねが非常に大切んじゃないかな、というふうに思っているところがあります。僕はこれが向こうに帰ってからもないんですけど。やっぱり地方分権をやっている中で、国はずっと受け皿のほうをやっていたんですね。要するに、地方分権するのはいいけども、都道府県特に市町村でもって受け皿になるような人材。そういうのがいないじゃないかって、だからいくらやっても駄目なんだ。だからそっちが、しっかりさせないと地方分権なんかは、できないよっていうのは受け皿論で、ずっと言ってきたところですよ。それでも2000年の地方分権でやったわけですが。正直言

って、地元に戻って、田舎に戻って、僕の高校の後輩が、市議員なんかやってることもあって、いろいろ応援してあげてるんですが。本当ね、本当がっかりするというべきか。嘆くって言うべきか、これはちょっとひどいですよね。草の根保守主義っていうか、茨城県では利権的っていうか、多分茨城県の県議員さん60ぐらいいると思うけど、半分以上が土建業っていうか建設業関係者じゃないかなと思うんだよね。帰ってちょっと県議員選挙があったんで、見たときにね、は一つと思ったけど。やっぱりこれはね、すごいですよね。そういう意味で僕はむしろ、ドイツがやってんですけども、地方自治体の特に管理職は、試験とか大学で教育して、プールしてリクエストがあると例えば、横浜市から神奈川県に移って、神奈川県から鎌倉に移るとかね。管理職はそういうふうに移って、こういう人材が来てくれるって言うのと動くような仕組みになってるんですよ。

— 今もですか？

川股 もちろんそうだと思います。だから、その前にちゃんとした教育があるんですけどね。やっぱりね、そうしないとレベルが上がらないなっていうふうな、感じをずっと昔からしてたんですけども。つくづくそういうことを、その筑波のネットに対するアドバイスとかなんかも含めて、そういうふうには思ってます。

それから、最後に参考みたいなことでちょっとあるんですが。非常に公式な予算説明っていうのは、年度に予算編成、施政方針の説明を市長がやりますので。これが非常に公式な説明になります。総論に関しては、飛鳥田さんのときには鳴海さんが書いてました。後半になって、入江さんが多分少し加わったと思います。各論は財政課がやってましたけども。どういう方針を出そうとしたかは、施政方針演説、財政課はノリトとか呼んでましたが、ここに書いてあります。だから、そういう意味では、見てもらうといいかなと思います。当然、図書館にはあると思います。それから、当時の財政事情について、鳴海さんとか飛鳥田さんがどう言ってるのか、ちょっと見てみますと。やっぱり鳴海さんなんかは、『人口急増で財政的には辛かった』と、いろんな『生活環境整備の要求』の中で、『しかも、雲霞のごとき大群』がどんどん打ち寄せてきて、『太刀打ちできなかった』。でも、そういう中でも『敗北感はない』、みたいな言い方してるんですが。僕なんか、思い出すと46年に入って、47年の2月ぐらいですかね。飛鳥田さんは、『俺はいくらか(敗北感)があるな』と、『手も足も出ないという感じ』だった、という言い方をしています。あと先ほどちょっと、飛鳥田さん内部改革やんなかった、これは松下圭一が非常に批判してるんですが、ものの本でも言ってるし、僕も松下さんとは結構一緒に原稿、本書いたりしましたんで。松下さんからも随分直接も言われました。ハセガワさんは、松下は『直流を交流に切り替え』る、役所の中で転換していくっていう現実を知らない、『ただ交流を流す電力の容量が多少足らなかった』って言ってただけ。『電力の容量』って何を言うのかなって。ただ、当時は何かね、都市科学研究室の松本さんに随分期待してみたことを、飛鳥田さんは言ってましたね。松本さんがいろいろもって、やってくれるんじゃないかなと思ってたんだけどもって、というようなことを言ってたけども。どうでしょうかね。それからあんまり期待してなかったか。

市民参加は、1万人集会とか市民参加いろいろ言うんですが。当時は情報公開はないんですよ。やっぱり僕も、筑波でいろんな問題があって、総合運動会の問題で、ネットの人たちが議会質問するに当たって、とにかく情報を全部洗わせて、情報公開しろって言って、リスト作ってさせたりなんかしたんですが。やっぱり情報公開っていうのは、大きいですよ。情報公開あると議員さんなり、市民の人たちも役所と平等に太刀打ちできる、とまでは言わないまでも、相当程度太刀打ちできる。議員も市民の人でもありますね。ただ、それがなくて隠されちゃったら全く分かんない、ということやっぱり情報公開っていうのは大きいなと、思ってます。

それから、飛鳥田さんの市政論っていうのは、いくつか鳴海さんとの対談を見て分かったのは、やっぱり飛鳥田さんは基本的に啓蒙的民主主義で、非常に先導的に市民生活に沿った形で、市民にとっていい政策を出す。だけど、この政策を支えるには、やっぱり大衆運動が必要なんだと。1万人集会も含めて、市税を使ったりなんかして、市民運動連合とかつくらせて、市民運動をやろうとするんですね。僕が田村さんの下でやった、総合計画1975のときに、48年にその総合計画を議論する場の試みとして各区ごとで区民会員の母体みたいなのをやって。それが翌年から区民会議になっていくわけですが、やっぱりこの運動をうまくつくれなかったということ、いろいろ反省してますよね。例えば非常に大きな問題として、東急田園都市線の東急からの学校用地をとる、あるいは六大事業も結局言ってみれば東急との『ボス交』になっちゃうわけで、財政部長とかなんかが出てっのね。大衆が立ち上げて東急に土地よこせっていうわけではない。だから六大事業なんかについても、市民がなんかもっとよりいい案を作るとか何とかっていうことはなかったわけで。やっぱりそっちに展開する余地がなかった。それが何ていうか、言ってみればそれが与党であった社会党、あるいはそれを支えた、市民の意識が変わって、それで職員も変わって。そういうことの中で、革新的なあるいは自治意識を持った市民、職員が育ってくる。ただし、そういうふうには、ならなかった、できなかったという感じを、だいぶ鳴海さんとの対談では言ってますね。それはそうだなっていうような。でも同時にこういう交流の電圧が足らなかった、電流容量が足らなかったっていうのは、もうちょっと何かなというような感じがするところがあります。その辺はまたいろいろある。

ちょっと書いてないんですけど、僕は今回やっぱり飛鳥田さんが、あるいは私たちが財政が厳しい、あるいはいろんな意味でのスタートが遅れたということの中で、多分今でもやり残してるのは、二つあるなと思ってるんですね。一つは、幼稚園と学校給食です。中学校の給食。これは幼稚園は基本的には、これはいいと、民間でやると言ってます。中学校給食は、当時金もなかったからやれなかった、今は中学校の弁当みたいなことで、いろいろやってるようですが。当時から、その後の僕なんかが財政課の係長とか、総合計画やってる段階でも、基本的には横浜市は金がないから、中学校給食はできませんよという言い方が中心だったんですが。やっぱりここが役人っていうか、公務員の悪いところかいいところか分からないですが、それに理屈を付けるわけですよ。いや、中学生をきちんと育てようと、親が思うならば親がきちんと子どものためにいい弁当を作るべきである、とかね。親が大変だったら、子どもだって弁当ぐらい作れるはずである、とか。そういうふうにしたほうが、より健康にはいいんだとかね。そういう自己努力みたいな、自己責任みたいな言い方の理屈も付けてきたはず。財政当局がじゃなくてね、教育委員会が。だからいつの間にか、金がないからっていう本流じゃなくて、金はあっても中学校給食っていうのは本来なくていいんだ、むしろ親や子どもたちが中学生が自分で、きちんとそこはやるのが本来のやり方だ、みたいな形に転換したんじゃないかなと、そういうふうに気がするんですね。ところが、それはね一方においては、先ほど社会が変わっちゃったって言ったように。とにかく、市民的に見ても非常に私たちの生活も貧しくなって、そういう意味じゃ貧困層の子どもも増えている。給食も食事できないような子どもが出てくるとかね。いろんな形の問題が出てきたときに、突きつけられると逆に非常に、やらないと困るみたいなね、社会の動きに対応できないみたいに、なってきたんじゃないかなと思うんですね。だから、もっと大胆にどっかで。僕は、たまたま海外研修で、本当はオオサワさんっていう財政課長が行くはずだったのに、行きたくないからおまえ行けとか言われて、行って来たんですけど。スウェーデン行ったときに、デイセンターみたいなのと、小中学校が一緒になって小中の給食なんかは、デイセンターと一緒にやってるんですね。だから要するに、高齢者が食べるのも子どもが食べるのも一緒なんだ。だからそういうなんか、違った中学校給食じゃない全く新しいねスタイルをね、金かかってもつくるみたいな、転換がなんでできなかったのかなって。それは逆にさっき言ったように、自己努力でいいんだみたいな、理屈をつくっちゃってるからなのかなっていうような。金がないっていうのは、客観

的かどうか分からないですけど、事実かもしれないけど。そこにこういう上乘せした理屈を付けて、逆にそういう理屈にとらわれてっちゃった。最初に言った、財政課が金がないっていう事実を示すために、決算調整でもって1桁にする、みたいなね。逆転した論理になっちゃってる、それがあんなってということが一つ。

もう一つはやっぱりね、僕は横浜370万、80万都市っていう点からすると。芸術文化の発信力っていうのは、極めて弱いと思うんですね。大学の経理係長とか部長もやったことも、あるんですが。やっぱり芸術文化そういう関係の大学がない。紅白歌合戦なんかでも横浜から中継流しますなんて出てくると、横浜アリーナかなんて見てるけどもそういう場しかなくて。やっぱりこっからそういうのが、発信できることが。先ほどヤミ起債って言ったけども、あの段階ぐらいでそういうのをつくっておけば、ちゃんとできてきたんだろうけども。結局後になって、余裕ができて施設を造って、みたいな形でやったんでは、遅過ぎたんだな。だから横浜ってやっぱり、そういう意味での芸術文化の発信力っていうのは、相変わらず弱いというふうな印象を、私は持ってます。たまたま茨城っていうこともあって、水戸芸なんていうのは、それこそ田村さんも関わってつくってくれたわけですけども。水戸芸術館なんかは、よく私は行くんですけども。この前も行ってきたばかりなんですけども。やっぱり、そういう意味では小澤征爾が館長やって、ハナモリが理事長やって小澤征爾もちゃんと演奏するみたいなことをやるわけですよ。なんで、横浜がというような感じを僕は受けてるところなんです。

ちょっと長いところになりましたけど。一応このぐらいにして。あといろいろ、僕も先ほど述べましたように、よく分からないなと思われそうです。皆さんからいろいろ聞かせていただければ大変ありがたいなと思ってます。

田口 一応このNPOは、田村明記念となっております。田村さんは、この財政的な面にどういう発言、ちらちらとは出てくるような気がします。どういう関わりをしてたんでしょうか。抽象的な質問なんです。

川股 はい。いや当然僕は、それは聞かれるだろうなと思ってましたし。いろいろ思い出そうと、考えてみました。多少悪い言葉で言えば、田村さんはやっぱり財政関係っていうのは、ある意味では多少ばかにしてたのかなっていう、感じがないではありません。つまり、ばかにしてたっていうのは非常に悪く言った場合ですが。やっぱりね、計画指導であって、金は後からついてくるっていうか、金をファイナンスをするのは、後からやりくりして財政当局が何とかするもんだと。そういう感じがあるんですよ。何となくね、だからあんまり市長査定の場で何を言ったかとか、僕が例えば財政課に移るときにも、あいさつしてるはずなんですよ。そんなときに、何を言われたのかとかっていうのはね、どうもひとつね浮かばないんですね。正直言って。

— 印象に残らないっていう。

川股 入江さんからは、酒飲んでる場だったけども、もっと地方債使っておまえ何とかできないのかって言われたのは、記憶してるんですね。公式の場じゃないんですよ。そういう意味では、国みたいな関係からいうと、大蔵省は威張ってて横浜だって財政当局はやっぱり威張ってたんですよ。威張ってて、あいつら威張ってても大したことはやってないと。できてないと、だから僕が財政課に行くに当たっても、勉強に行きますみたいなことで。あいさつしたと思うんだけど、ちゃんと勉強したら戻ってこいみたいなこと言われた感じもないし。というあんまり、深くないかなっていう感じはする。それはね、鳴海さんも。変に財政当局を尊敬しちゃってるんだよね。さっき言ったように、職人芸的によくやってみたいな、感じでね。どうもね、もっと突っ込んでないんですよ。要するに、こういうことやればもっと、金を



無駄にするじゃないみたいなね。もっと生み出せるはずだ、みたいな感じは鳴海さんは全然言ってないんですよ。

―― プロジェクト室でさ、各局の調査費全部チェック入れ始めた。

川股 確かに考え方によっては、調査費みたいなものは、それが3年後4年後に事業につながったり、するわけだから。そこで現実的な方向づけみたいなものは、できる可能性があるんで。結果的に各事業局を動かすという意味では、本来有効なところ持ってますよね。

―― でも調査費も吟味すると。こんなことやっていいのかなっていうのもあるわけでしょ。

―― まだね、金があったでしょ。金はね僕なんかはね、逆にね、なんでこんなの50万～100万でやるんだ。

―― やるなら200万～300万でやれよ。

―― 僕は逆のがありますけど。なんでこれ調査費ついたので聞いても、誰も答えられない。だからある職員が、こんなんやったら面白いでってポット出したら、金付いちゃったんだよって言われて。具体的に何やるんだと言ったら。これから考えるって、おいおい待てという話もありますね。

―― 川股さんの市民の運動を展開する形に六大事業はいかなかったっていうのは。

川股 これは別に僕が言ってるんじゃないですよ。飛鳥田さんのものの考え方、市政論の中心はどうもそこにあるなっていうこと。

―― これ田村さんからすると、田村さんの市民っていうものが出てくるというときに、計画を都市計画については、自治体が主体だっていう確か議論をやったような、記録がありますよ。

川股 でしょうね。

―― だから、市民が出て来ないんです。ある意味。だから今の言葉で言う忖度じゃないけども、市民の考えてることを俺たちが代行するって自治体が。だから特に市民と計画論をやるという形には、いかなかったんじゃないかな。それは俺たちがちゃんと理解した上でやってるんだ、ちょっと思い上がりかもしれないけども、そういう傾向があったような気が、今から考えてみるとしますね。

―― だから国鉄貨物線問題とか、金沢の埋め立てに反対されると、途端にどう動いていいか分からなくなっちゃうとか。

―― そうじゃなくてさ、基本的にはこの段階、飛鳥田さんの時代に始めたのは、いわば骨格事業やってるわけよね。

だから骨格やるときには、それは市民の側から出ない。評価できない、いわば骨格事業については今、川股さん言ったような、財政からのチェックもいるし、法的なチェックもいるし、さらに言えば専門家集団がいなきゃできない話。骨格事業については、行政が責任持たなきゃいけない。ただ、舞台の場面では当然市民の生活権の話が出てくるから、金沢のときもそうだし。現場での対応については、相当やってるわけなんで、出てきてからの。だからそれはある意味では、飛鳥田さんの市政があるから、やらざるを得ないっていうか。何となくやればそれに対する対応は、誠実にやっていく形になるだろうな。だからやっぱり、大きな意味での住民参加が。

川股 住民参加って言えるのか、どうか分からないけども。鳴海さんと飛鳥田さんの対談を読んでも、六大事業について40年2月に市会全員協議会で説明をした。その後、こういう総合計画なんだ、パンフレットが結構出てくるんだけども。やっぱりあの段階で、市民討議を行うべきだったと、いう言い方をしてるね。でもそれはね、言葉としては、そういうのやっつくべきだったっていうのは分かるんだけども。こういうパンフレットを作ってね、六大事業のパンフレットを作って、でも40年に作って41、2年、僕なんかが入る前にパンフレット作ったところで。作って皆に配ったところで、どうい議論ができたのかというのは、僕はちょっとイメージわからないけども。

— そうだね。

— 多分議論にならないでしょ。

— そういうパンフレットを作って出したこと自体が、今までないわけでしょ。

川股 多分ね。

川股 議論っていうか、どっちかっていうとそれは、飛鳥田さんが死ぬ前に記録しておく。あのときには、どうだったかっていうことを記録をしておこうっていうんで。鳴海さんが聞き分けしてるんですね。ずっと。

— けどさ、港北ニュータウンだけは、飛鳥田さんが現場行ってやっちゃったわけじゃない。

— 協議会つくる時のこと。横浜市は市民の側に立ってますっていうさ。市長が約束したって。結局だから、飛鳥田さんの抱いてる夢なんだな。

川股 飛鳥田さんの夢というふうに言われると、この飛鳥田さんの3回、4回鳴海さんが、そのときのあれはどうだった、みたいな聞いている中で。そういう意味じゃ、僕らからすると多少笑っちゃうみたいな。パリ・コミュンなんだよね。

— そうです。

川股 要するに1万人集会も要するに、パリ・コミュンは1848年の、48年かなパリ・コミュンその中で、女性の参政権も、女性の仕事のどうのこうの、そういうこともちゃんと皆で議論して決めて、ああいう短い時間でもちゃんと決め

て。それができてる、1 万人集会もああいうふうに、やってそこで横浜の未来を描くようなことを決められるはずだ、それが俺の夢だという感じなんですよね。パリ・コミュンなんですよ、だから港北ニュータウンでそういうふうに通っちゃうのは当然ですよ。これはね。地元の地権者の皆さんがたが、全員この協議会で皆さんが決めて、私たち市はそれを全部支えるんだって。そういうふうに通うはずですよ。そういうような、発想だから。僕、これ読んで、パリ・コミュンをイメージしてんのか。だからすごい、ずれてるなって。だから先ほども、現実的には全部ボルシェビキとか言ったところで、現実じゃ誰も分からないし。できっこないから、俺がやってくるのが 1 万人集会であり、区民会議でありそういう場でもって、公害防止協定であれ、なんであれそういうものも社会主義どうのこうのとは関係なく、資本主義社会の中でも十分いろんな改良の措置ができるんだと、それを一生懸命やるんだと、言ってるんだけど。夢としてはそっちにあるんだよね。

―― 田村さんは例えばそういう、市民運動について、どういうふうに見てたと想像されますか。

川股 僕はあんまり、どっちかという。あんまり関わってないんですよ。

―― でもなんか、田村さんがそういう場面出たっていう、イメージがないんだよね。

―― いや、義也っていう兄貴はパリ・コミュンに近いほうの思想持ってたよね、はっきり。それと明との戦いっていうのが、家族のやりとりをここに書いてあるけど、2 人でやってるのを聞いているわけです。その姿は明らかに、明は市政側の立場に立ちちゃって、責め立てるのは義也のほうで、その姿をずっと見てたんですけれどね。だから明が割とそういう意味では、飛鳥田さんとの距離を置いてた可能性は、ちょっとあると思う。逆に言うと、思ってたんだけども。ただ、今度その中に彼らだけの論議の中で、話が組み立てられてると、そうか。

―― 鳴海さんが書いてるんですよ。

川股 飛鳥田さんの聞き役で。

―― 要するに、飛鳥田さんというよりは、鳴海さんの思想じゃないですか。

―― 飛鳥田さんもね、基本的に言うとやっぱり任せたんですよ。

―― 僕が何度もヒラの時に、市長のところにも田村さんと 2 人で行ったことあるけど。基本的には、任すんですよ。任したっていう感じなんですよ。

―― まちづくりのほうは。

―― だから基本的に飛鳥田さんは、まちづくりでああだこうだっていうことは、ほとんどない。責任持たなくちゃいけないなくなっちゃうからですよ。鳴海さんもやっぱりそこには立ち会わなかったよね。

— だからある意味、明は天皇って、扱われた状況があったのかな。

— いや天皇っていうのは、自分で言ったんじゃないで周りが…。

— 田村さんはそういう気持ちはないんだよ。逆に言うとやっぱり役所とかに入ってきて、旧来型のね。役人と仕事してあつれきが出るでしょう。そういうな苦勞を一つ一つやっぱり、乗り越えてかなきゃいけないところが、大きかったんじゃないかなと思うんです。

川股 住都公団に施工したのは、なぜだったの。ニュータウンの延長、仕事がなくなるから。

— すいません。また続いて、同じような質問なんですけど。六大事業のやり方がどちらかというと、民間にリスクを負わせるという形であった。田村さんは宅開要綱で公益用地を出させて、建設投資上は横浜市としては余裕ができたということがあった。仮に、六大事業や宅開要綱がそういうふうに動いてなかったとしても、高度成長の中でつましく、横浜市いろんな投資しなかったから、余裕ができたというふうにも言えますかね。

川股 六大事業はああいう構造においてある限り、さほど市税を使わない。ベイブリッジであれ高速道路であれ道路局さんが、やらざるを得ない関連街路という整備で、金を使うことはあったにしても。埋め立て、それから地下鉄、公団ニュータウンについて言えば確かに、学校用地を買っていかなくちゃいけないことが出てくるけども。そうね、大きなそういう金がかかってくることではないですよ。ただ、港北ニュータウンで残っちゃった学校用地を買い取るって言われたときには、そんな金あるかよっていうことをね。でも結局買ってるんだよね、あれね。研究所として…。

川股 買ってはいるんだよね、あれね。だから、あの六大事業に関して言えば、そんなにはね、負担がかかってくることはない。

川股 宅開要綱の関係で言えば、田口さんが試算してくれはるけども僕はね、目の子で申し訳ないんだけどね。5000億円ぐらいかなと見てるんです。今、宅開要綱で持ってる今の土地もね、多分学校用地で20校以上は持ってると思うんだ、まだ。だからそういうのも含めてだけどね。だからやっぱり社会福祉施設なんかを、造るのに結構、港南台で転換してるみたいだし。僕は区政推進課長に出たときに、最初地図見たらやっぱり役人っていうのは、こういうことやるんだなと、つくづく思ったのが。高齢者施設とか、社会福祉施設とかそういうのは皆緑区とかね、旭区とかね、ぎりぎりんとこに置いてあるんだわね。ぎりぎりの一番遠い所に置いてあるわけ、区役所から。

川股 だから調整区域は、土地が安いとかいろいろ理屈は付けられるかもしれないけども。地元が一番近くにあったのは、児童相談所だけであとは皆学校で、人間っていうのは皆そういうことをやるんだな、と思いつつも。逆に宅開要綱で取ったのは学校用地だから、そんな外れてるところにもないわけですよ。ある意味じゃ近く、真ん中ではないけどもそれなりの所が取ってあるんですよ。そういうのが、高齢者施設とか障害者施設とかに変わってくとね。ある意味ではね、物の見方が非常にオーソドックスなんじゃないかなって感じがしますけども。港南台なんか結構、心身障害

者の施設にしたんでしょあれ。心身障害者なんてあれ、非常に大変ですもんね。

川股 東洋化学？

―― 東洋化学。あれを都市開発計画やらないって言われて、きちゃったんですよ。6400 平米ぐらいの土地を出せって公用地…。

―― そのときにね、僕は上司からね。まだ決着つかないのかって怒鳴りつけられたんですよ。相手はその次公団の理事なんだけどね。担当者同士。それでね結局向こうは、首都圏本部長っていうのが会いに来るんですよ。上司が誰も取り次いでくれないから。

―― 僕と田村さん 2 人になっちゃうんだよな。

―― でもね、その田村さんの言葉がね、僕にとって衝撃的でした。それがバックボーンになるんですよ。普通ならね、少し何とかしろと言われるかなと思ったんですけどね。てっぺんが話してくれないなら結構ですって。その一言。それで結局 8300 が 6 億 4000 万の土地が 2000 何百万だから。

―― 要するに買わないと、この値段以外では。

―― 買わない。嫌ならやめてもらって結構。僕はこれ助かりました。

川股 日本ガイシは…

―― 僕らがやった後。あれもマンションだったやつを、オフィスに切り替えただから。

―― だから田村さん、そういう意味では、そういうところははっきりしてたんで。助かりました。

―― そりゃそこで、上がぶれたら下はやってられない。

―― 上はぶれちゃいけない。

―― 田村さんは日本生命で、いろいろ勉強してたし。それから不動産鑑定士第 1 号だって言って自慢してたから、やっぱりだから自信があったんじゃないですか。

田口 この NPO としては、田村明なるものの、影を浮き立たせたいというのは、どうしてもあるんですよ。

川股 僕が疑問だといっている、この外部資金の問題をどういうふうに皆さん見てます？ 僕はどうもね、外部資金活

用とかね、その民間活力以前の段階からね。こういうふうには病院も含めて、横浜がやってきたということの根拠って何なのかなと。

―― そっちの病院経営の情報なんてさ、あの人たち勉強してたかな。

川股 病院関係？

―― 経営の内容。

―― その次に出てきたのは、横浜スタジアムですよ。

川股 横浜スタジアムも面白かったよね。だから、僕はね、病院は分からない。

川股 ただ、病院はもしかすると、病院に対する赤字の不信感かなって、感じもしないではない。

―― 飛鳥田さんの弟さんは、お医者さんなの？

川股 そう、医者。

川股 結構それなりに、並ぶわけですよ、病院であれシーサイドラインであれ、横浜スタジアムであれ。飛鳥田さんが、関係したもので結構あるわけですよ。

―― 衛生局の所轄に入ってるやつになったわけじゃん。いわゆる済生会のあれが突然出てきた感じ。

川股 いやそんなことない。衛生局がだって、そういう方面別病院っていう構想を持って、もちろん市長の了解を取ってそうするんだもん。民間でってこと。

―― 方面別全部やる前提だったんですか？

川股 もちろん。

―― 労災もそうだよな。

川股 労災もそうだし、全部……。

―― たださ、今田口さんが最初に質問したことの、答えにはなっていないんです。今の話は。だから、田村明が一体財政上の中でどういう特徴を持っていたかと、お思いですか。全然なかったんですかっていう、そういう……。

川股 そう、そこがよく分からないんですよ。僕もだから、当然のこととしてね、これを頼まれたときから、ずっと考えてはいたんですよ。どうもね……。

―― 出て来ない。

川股 もうひとつね。

川股 ただ、言われてる中で、民間っていうのはあるわけですよ。民間活力っていうのは、誰が出したんだろう、誰がそういうある種の路線みたいなものをしたんだろうな。

―― 彼は自分で、それは俺が言いだしたんだって、何となく言ってるんだけどね。

―― 規制じゃなくて何となく、誘導するっていう言葉を使ってるね。

―― そのこと、民間活力という言葉は随分前から言ってたから、逆に言うと。彼が思いの中にあっただろうけど、公的にどういう形で、どういうふうに文字になってるかとか、何とかっていうことになると、全然分からなくて今の話の中にそれがなんか組み込まれてたのかなと。勝手に思い込みながら聞いて……。

川股 そうなんですよ。だから僕もだからその辺は、飛鳥田さんから出てたとすると、要するに公務員不信っていうかね。官僚不信みたいな形のアンチとして出てくる可能性はあるかと、非常にネガティブにしか出てこないんですよ。鳴海さんは出てくる余地がないんですよあんまり。そうすると田村さんかなって……。

―― やっぱ田村さんはまちづくり系に絡んだ話は、方針出しただけさ。福祉衛生についてはほとんどしゃべってない。

川股 それはね。ただ……。

―― ちょっとすいません。その当時っていうのは、総合計画っていうのは財政局で作ってたんですか。

川股 だからこの 1985 っていうのは、私が企画調整室のプロジェクト室にいたときに作った。その後の「ゆめはま 2010」、だから全部企画サイドですよ。

―― 企画調整局的な系譜と、財政局的な系譜っていうのはどっかで一緒になるんですか。それは全く分かれてなかったですか？

川股 企画財政局ができるのは細郷さん……。

―― 細郷さんの 2 期目。

川股 でもね、あれはどう見てもただ集めただけだね。

川股 総合計画は原さんの、原理事の下でやってた。

―― こっちは、大きな機構改革をやりたかった。僕らから見るとそういう感じだったから。

―― だから、企画財政機構になったときも、僕も課長で行ったんだけど。片っぽで金を締め付けて、片っぽは使いた  
いなくていうね。こっちが財政難。ノーっていうこともあってさ。

―― 局長室挟んで？

―― そう、ドアが両方付いてる形。

川股 あんまり、ああいうのが利があったとは思えないね。

―― でも田村さんも実務をやられたのは 10 年か 11 年ぐらいでしょ。そのときの、六大事業の進捗から答えると、や  
っぱりそこまでまだ介在してない事業もあった。

川股 そう。

―― 地下鉄もわざわざ遠回りしたりして…。

―― あれは地元に対してすごい怒りがあった。ちゃんと抑えなかった。名前言わないけど、われわれの上司なんか  
もね、結構怒られてましたよ。これでいいのかね。

―― なんかお金の面は、あんまりそこまでのところは言ってないかもしれない。埋め立てのマルク債だって多分財  
政の話でしょ。

川股 でしょうね。

田口 はい、若干の謎は残りましたが…。

川股 もしかするともうちょっと民間活力の問題は、田村さんのものをもうちょっといろいろ読んでみると、ヒントが出て  
くるかもしれないな。



田口 はい。という大きな宿題をいただきました。そういうことで、川股さん本当に長時間ありがとうございました。

(了)